専修大学社会科学研究所　社会科学年報　第21号　1987年3月

G・オーウェルの全体主義認識における政治思想

——ドストエフスキーの「大審問官」伝説を引照して——

小沼堅司

一　希望から幻滅へ——オーウェルとドストエフスキーにおける大審問官的主題の形成についての長い序論——

二　大審問官とオブライエンにおける権力の弁証

(一)　イワン・カラマーゾフの壮大な劇詩——大審問官による権力の弁証——

(二)　権力の司祭たち——「権力の目的は権力それ自体である」、「拷問の目的は拷問それ自体である」（オブライエン）——

三　中間考察・「脆拝の全体性の欲求」（大審問官）の勝利か——ソヴェト・ロシアにおけるレーニン宗儀（カルト）とスターリン神話の形成——

四　オーウェルにおける全体主義の悪の認識

(一)　スペイン戦争における「悪夢の経験」からスターリン体制の認識へ

(二)　転移ナショナリズム（代替信仰）と権力崇拝の批判

一　希望から幻滅へ

――オーウェルとドストエフスキーにおける大審問官的主題の形成についての長い序論――

私たちは、G・オーウェルのデトピア小説『一九八四年』を読むとき、陰惨な恐怖とその恐怖を通過したあとの怒りをまじえたさまざまな感動を味わう。それはにがい感動である。極限的な監視社会のなかでなおも「自由」への脱出に身を賭ける主人公ウィンストンの行為のなかに、私たちはかすかな希望を読みとり、守るべき価値や信念への意志に共鳴する。悪夢のような近未来の極限状況において、いわばスクリーン上に逆さに映し出される作者の自由への意志のなかに、改めて守るべき価値の在りようを想い反芻する。どんよりとした鉛色の背景のなかで進行する恐怖の物語であるが故にそれだけ読者は人間の尊厳を想い、倫理的意志の大切さを反省させられる。

だがこの作品は、さまざまな不幸な感動を媒介として読者に倫理的衝迫力を及ぼすだけではない。政治小説として、権力と管理のメカニズムの冷静な分析をも提出している。それは、全体主義社会における政治のすぐれた考察でもあるからだ。全体主義的権力による監視と処罰、管理される者の相互監視と相互告発のシステム、その不可欠の要素としての憎悪の自己増殖装置の完成、全体主義社会の頂点にそびえる見えざる指導者（ビッグ・ブラザー）への崇拝とその物神化装置の政治的機能などである。しかしまた政治小説として『一九八四年』は、ニュー・スピークによる意識の管理（考える能力の縮少）、性（セックス）の管理による抑圧されたリビドウの政治的外在化と指導者への一元的投射、愛によるウィンストンとジューリアの「まともさ」を求める抵抗など、政治における人間の問題の考察へと私たちをうながす。さらに私たちは、政治の過剰と過剰な政治の社会における人間の状況の考察を通じて、人間存在の

原状況ともいうべきものを読みとることになる。近未来に逆投影された作者の価値観に共鳴する過程で、私たちは改めて人間とは何か、人間の尊厳とは何か、自由とは何かという根本的な問いを反芻させられるからだ。そして人間オーウェル（エリック・ブレア）が何よりも大切な感覚として生涯もち続けた「人間的品位（decency）」の感情を共有するからである。

人間的品位の感情は、それ自体としては政治的・社会的プログラムにはなりえない。しかし、そのプログラムを支える思想的根拠とはなりうる。さらにまた、権力渇望者（パワー・モンガー）の言語に抵抗する思想的拠点にもなりうる。この意味では、『一九八四年』は、人間的品位が破壊されてしまった社会の物語として読むことができる。怖しいのはこの社会が抑圧された者の先頭に立つと主張した人々によって確立されたことである。彼らは権力に武装された知識と技術とをもって、庶民の感情とこの感情のうちに息ぶく自由とを抑圧し操作し管理しようとする。権力の言語は、他者との共生感情に基づく品位を体系的に破壊し、これまでの世界に例のないほどのひどい抑圧体制を生み出した。そして抑圧された情念を憎悪の自己増殖メカニズムへと流し込み、そのことによって全ての忠誠心を国家へ、国家の指導者へとふり向けようとする。オーウェルは、現代文明が力の崇拝と権力本能によって支配されているという事態を、ファシズムとスターリン主義という「我々の時代の精神史の大きな特徴」（「ラフルズとミス・ブランディッシュ」）とみたが、彼の明晰な散文は、あくまで、普通の人々（コモン・ピープル）のもつ人間的品位の感情とそれへの共感能力によって、このような現代の権力崇拝（カルト・オブ・パワー）を撃とうとした。

経験の作家オーウェルは、『動物農場』や『一九八四年』などで描いた革命の力学や全体主義支配のメカニズムについての認識を、スペイン戦争、とりわけもう一つの内戦ともいうべきバルセローナの五月事件（一九三七年）とその後の恐怖政治の体験、そしてその背後で糸をひくスターリンの党の粛清劇についての——当時の知識

人においては例外的な――洞察のなかから発酵させていった。一九三六年末、一人の義勇兵としてスペイン戦争に参加したオーウェルは、『ウィガン波止場への道』でいくつかの疑惑と重大な留保をつけて表明していた社会主義への希望が、バルセローナやアラゴンの前線において実現されつつあるのを見た。そこではなお革命が進行中であり、「農民は土地を没収し、産業は集団化され、大資本家は殺されたり追放されたりし、教会は事実上廃止され」ていた。(「スペイン戦争回顧」)オーウェルは、労働者階級が権力を握ったバルセローナやアラゴン前線での義勇軍組織のなかで「平等の空気」を吸い、「階級なき社会のモデル」における人間的連帯や「民主主義型の革命的規律」のすばらしさに感動した。この「社会主義の小宇宙」の精神的空気のなかで彼は、社会主義の希望を強く確信した。それは、スノッブ根性や金銭に汚れたイギリス社会での無気力やシニシズムからは考えられないような希望であった。このスペイン現代史の短い一章を回想するときのオーウェルの筆致は、「普通なら数年たった記憶だけがもつ妖しい美しさ」さえおびている。それは限りなく抒情的なひびきをたたえている。(『カタロニア讃歌』第三章)しかし、オーウェルの社会主義への信念に生命を吹きこんだスペイン体験は、同時にまた、社会主義に対する不信の念を植えつける舞台となった。階級のない社会のすばらしさをみずから体験した彼は、短期日のうちにそれが圧殺されるのを目撃せざるをえなかった。共和国政府内部での諸党派間の政治的対立と憎悪の恐ろしい光景を目のあたりにし、また人民戦線政府と新しく創設された人民軍とのなかで影響力を増した共産党と政治委員(コミッサール)の恐怖政治に追われる身とさえなったのである。

オーウェルが一人の民兵として参加したスペイン戦争は、なによりもまず政治的戦争であった。幾多のスペイン戦争史の研究が明らかにしているように、ファシズム諸国から政治・軍事援助をうけた反乱軍、ソ連から軍事援助をうけた共和国政府、それに「不干渉委員会」における列強諸国の動きを含めて、この戦争について純粋に

軍事的角度から記述することは不可能である。少なくとも最初の一年間の出来事を理解するには、政治路線の背後で進行していた各政党間の争い、そして「政党政策なるものの恐しさ」を知らなければならないという意味で、政治的戦争であった。スペインが「頭文字の伝染病（a plague of initials）」にかかったように思われたほどに、「煩わしい名前――PSUC、POUM、FAI、CNT、VGT、JCI、JSU、AIT――を持つ各政党や各労働組合の万華鏡」が複雑な政治模様を織りなしていた。そしてとくにカタロニアでは誰も不明確な態度のままでいることはできなかったし、不承不承であれいづれかの路線に加担せざるをえなかった。なぜなら、政党・労働組合間の路線の対立に注意を払わない人でも、その人自身の運命は、あの複雑な万華鏡の織りなす政治路線の対立の渦に巻き込まれてしまうからであった。彼らは、「民兵としてはフランコを相手に闘う一兵士であるがしかしまた二つの政治理論（スターリン主義とアナキズム・独立共産主義）の間で闘われつつあった巨大な闘争に使われる歩でもあった」（『カタロニア讃歌』）のである。

戦争か革命かではなく、ドイツ・イタリアのファシズム国家の武器援助に支えられたフランコ反乱軍との戦争に勝利すること、そしてこの内乱を制して人民戦線がファシズムを打倒すること――おそらくこの判断は正しかったかもしれない。しかし、この路線に反対してあくまで革命によって、また革命を通して（のみ）フランコ軍に勝利しうるという方針を貫ぬこうとした勢力を、「裏切り分子」、「フランコの第五列」、「フランコと並ぶ第五勢力」として断罪することは重大な事実の歪曲である、それは歴史の捏造である――オーウェルは抑えきれぬ怒りをもってこの歪曲を告発した。その時オーウェルは、はじめて「政治」を学んだ。そして事実を管理して、あるいは抹消しあるいは捏造するイデオロギー支配の恐怖を学んだ。スペイン到着直後レーニン兵舎で出会ったみすぼらしい、しかし漂泊孤寂の雰囲気をもった一人のイタリア人民兵の「水晶の魂」をいとも容易に破壊してし

まうイデオロギー政治と、「嘘をつくことを職業とする人間」とに我慢ができなかった。「嘘」が政治の重要な手段であり、「言葉の歪曲」がイデオロギー政治の重要な特徴であることを学んだとき、そしてそれを決して許そうとしなかったとき、人間オーウェルは生れかわった。このスペイン戦争という「経験の学校」がなければ、『動物農場』(一九四五年)も『一九八四年』(一九四九年)も生れなかったであろう。彼が義勇兵として所属したPOUM(統一マルクス主義労働党)に対する共産党の弾圧は、スペインにおけるオーウェルの経験を完成したといってよい。なぜなら、前線で頸部貫通銃創、つまり弾丸が喉頭のすぐ下の頸部、体の対称軸のほんの少し左側から入って右側の背中の頸部の付け根から抜け出るという負傷にもかかわらずほんの一ミリ動脈をはずれるという幸運で奇跡的に命をとどめたオーウェルは、しかし、電気治療その他の手あてを受け除隊許可証をえてバルセローナにもどったとき、いわゆる「トロツキー=ファシスト」陰謀説によって演出された検閲・逮捕・投獄・暗殺の「恐怖政治」の追求の手から命からがら逃れなければならなかったからである。POUMの義勇兵であったことによって「ファシストの手先(スパイ)」の洛印をおされたオーウェルは、幾つかの危機をかいくぐって幸運にもピレネーを越えて脱出に成功した。フランスの最初の駅バニュールで、彼と妻アイリーンはスペインでの経験が残した感情を反芻した。それは言葉では伝え得ない光景や匂いや音と混ざり合った気持だった――「塹壕の匂い、思いも及ばぬ遠くまで広がる山の夜明け、弾丸の冷たくパチパチいう音、爆弾の轟音と閃光。人々がまだ革命を信じていた十二月、バルセローナの朝の冷たく澄んだ光、兵舎の中庭にひびく長靴の足音。それから、食料品を買う行列、赤と黒の旗、スペインの民兵の顔。」スペインでの悲惨な出来事にもかかわらずオーウェルがえたものは、幻滅とシニシズムだけではなかった。彼は書いている――「スペインでの経験は、人間の人間らしさに対するぼくの信念をふやしこそすれ、減らしはしなかった。」(『カタロニア讃歌』)この「人間らしさ(ディーセンシイ)への信念」によって、

彼は、事実の捏造、歴史の歪曲、党物神化と指導者崇拝、粛清という名の大量政治殺人、恐怖と狂気のシンフォニーのかなでる憎悪と相互密告、〈体制的分裂病〉を生みだし強化したスターリンとその党の粛清機構、数十種におよぶ拷問のテクノロジー、「魂の技師」たちの恐るべき人間改造の野望等々、総じて全体主義の悪と闘った。スペインでの経験は、この悪の姿の何たるかを、そしてそれを隠蔽しようとするイギリス左翼知識人のソ連崇拝と「親共産党的検閲」の現実を教えた。この「経験の学校」なしには、真実管理（リアリティ・コントロール）と新語法（ニュー・スピーク）、それにテレスクリーンによる監視と憎悪操作とによって支えられるオセアニア体制の分析も、平等社会の社会主義動物農場のなかから智にたけた豚族の指導者ナポレオンが独裁権力を掌握するに至る革命の力学の寓話的分析も生れなかったであろう。

ドストエフスキーの最後の長編『カラマーゾフの兄弟』（一八七九年）の第二部第五編五章「大審問官」は、出版以来一つの短篇小説として、文学的エッセイとして、思想史の論文として、あるいは人間の心理の複雑な内的葛藤劇として、文学者、政治学者、哲学者、神学者、心理学者の関心をひきつけてきた。とりわけ政治思想史家にとっては、無神論者イワンの壮大な劇詩として語られているこの十六世紀スペインの大審問官とイエス・キリストとの想像上の対決は、自由と幸福（地上のパン）とのアンチノミー、精神的自由という重荷の放棄と権威への完全な服従、このような人類の根本的苦悩の源泉としての「跪拝の全体性の要求」と精神的独裁の生成、そして――ドストエフスキー自身が「創作ノート」や『作家の日記』、それにいくつかの手紙で明らかにしているように――この劇詩の背後のモティーフである数千の審問官を擁する「恐るべき軍隊」としてのカトリック教権制とその愛よりもむしろ恐怖に基づく忠誠の要求、ロシアの急進青年層に浸透しているヨーロッパの無神論的社会

主義における地上のパンの要求とバビロンの塔（社会主義の未来の王国）の予言、それに良心の自由の完全な隷属化の問題など、権力の本性についてのじつに豊かな思想的考察を含んでいる。

『カラマーゾフの兄弟』は、筋立てとしてはドミトリイ、イワン、アレクセイ（アリョーシャ）、私生児スメルジャコフという四人のカラマーゾフ兄弟と淫蕩な父フョードル殺害の物語である。しかし真の主題は、「神はありや、不死はありやという永遠の問題」（イワン）、あるいは「そこでは悪魔と神との戦いが行われている、そしてその戦場が人間の心なのだ」（ドミトリイ）という問題である。この主題が相対立する登場人物を通して、また各人物の苦悩に満ちた内的葛藤を通して展開されている。例えば――知的で懐疑的な無神論者イワンは、父フョードルとドミトリイとの和解のために修道院の中のゾシマ長老の庵室に家族一同が会した重要な場面で、次のような理論を打ち立てた。人間は霊魂不滅の信仰があってはじめて善行を行なう、従って逆にいえば神や不死を信じていない者には善行はありえない、つまり「すべてが許されている」と。また、自分の「ユークリッド的な地上の頭脳」では神を理解できないから「神を認める」というイワンは、しかし、神の創造したこの現実の世界を受け入れることはできない。その説明として彼は新聞から集めた無数の小児受難の例を挙げている。「永遠のハーモニーを手に入れるためにすべての人が苦しまなければならない」ということによって、いたいけない子供たちの苦しみを説明できるのか。永遠のハーモニーに支払う代価としては、それはあまりにも高すぎる。罪もない七歳の娘をむちで折檻することに肉体的快感を覚える父親、寒い夜、五歳の娘を便所に閉じこめ、排泄物を顔になすりつけたり、口に突っ込んだりする両親、大事な犬の足を傷つけたという理由で八歳の農奴の男の子を雪の中で裸にし、猟犬にずたずたに引き裂かした退役将軍。誰がこのような子供たちの苦しみを償うことができるのか。それ故――と、イワンは結論する――「僕は自分の入場券を急いでお返しする……その入場券を神様に謹ん

でお返しする」と。無神論者イワンの理論に対して、アリョーシャは次のように反論する。あらゆることを赦すことができる人がいる、あらゆる苦しみを償うことのできる人がいる、なぜなら「その人は、ありとあらゆる人、ありとあらゆるもののために、自分で自分の罪のない血を捧げたのだから」と。これに対するイワンの反論が大審問官の伝説であった。

その意味で、その後の物語の展開――ゾシマ長老の臨終の場面、父フョードルの殺害、ドミトリイの回心の経験、殺人を含めて「すべてが許されている」というイワンの理論を実行に移してフョードルを殺した私生児スメルジャコフと、彼の罪に対する自分の責任に苦しみ、罪悪感から幻覚に陥り悪魔と長い議論をするイワン、裁判、ドミトリイの有罪判決とシベリヤ流刑など――と結末を含めて、『カラマーゾフの兄弟』は、「大審問官」で提示された対立的主題の劇化である。ドフトエフスキー自身、「作品の残りの部分が、『大審問官』とその前の章『反逆』で示されたイワンによる『神の力強い否定』に対する『解答』をなしている」と語っている。(J・S・ワッサーマン編『ドストエフスキーの「大審問官」』「序論」参照) 作品の主要人物は伝説の主人公のいずれかの側に与している。大審問官と悪魔の側に立つイワンとスメルジャコフ、そしてニヒリズム、無神論、利己主義。キリストの側に立つゾシマ長老とアリョーシャ、「新しい人間」となったドミトリイ、信仰、利他主義。キリスト的愛の実効性を受け入れる者と拒否する者のそれぞれの運命。

深遠な歴史哲学を含む「大審問官」伝説は、最晩年のドストエフスキーが思想的な恐怖と戦慄に身をおののかせながら、同時代の無政府主義(アナキズム)と社会主義という瀆神と破壊思想に抵抗しようとして創作された。ドストエフスキーは、ある手紙のなかで、神の否定ではなく「神の創造の意義」を否定する主人公が「最高度に現実に存在する人物」であると告白している。(ニコライ・アレクセーイェヴィッチ宛書簡、一八七九年五月十日) またもう一つの

手紙も彼の社会主義批判の意図を示している。彼は次のように述べている。「現代の否定論者、そのなかでも最も旗幟鮮明な否定論は、自分は悪魔の忠告に従うと臆面もなく宣言し、そのほうが人間の幸福にとってはキリストよりも確実であると主張しています。わがロシアの、ばかげた（だが恐しい――というのはそのなかに青年層がいるからですが――社会主義には）――指令が与えられています、しかもそれはどうやらきわめてエネルギッシュな指令のようです。つまりバンとバビロンの塔（言い換えれば社会主義の未来の王国）それに良心の自由の完全な奴隷化です――むこう見ずな否定論者と無神論者はすでにその域にまで達しているのです。ただちがうところはわが国の社会主義者たちは（それはなにも地下にひそんでいるやくざなニヒリストだけとは限りません――それは貴兄もよくご存じでしょう）、意識的なジェスイットであり嘘つきであり、彼らの理想が人間の良心に対する強圧と人類を家畜の群れに引きおろす理想にほかならないことを告白していないのに反し、小生の社会主義者（イワン・カラマーゾフ）は誠実な人間で、『大審問官』の人類に対する見解には異存がなくキリストの信仰は人間をその実際の価値よりもはるかに高いところへ引き上げてくれた（事実かどうかは別として）ことをはっきり認めている点です。問題はぎりぎりのところまできているのです――つまり『きみたちは、人類の未来の救済者であるきみたちは、はたして人類を軽蔑しているのか、それとも尊敬しているのか？』というわけなのです。」（同、六月十一日）

私たちはこれから、『一九八四年』の拷問者オブライエンと主人公ウィンストンとの対話のなかで展開されている「権力の目的は何か」というテーマを、「大審問官」伝説を引照しつつ検討することにしよう。（第二章）そのテーマは、『一九八四年』の構想に際して決定的な影響を与えた革命ロシアからの亡命作家ザミャーチンの『われら』における自由と幸福のアンチノミーというテーゼと密接に関係している。つまり「自由なき幸福」

（エデンの園）か「幸福なき自由」（楽園追放）かの対立である。そのザミャーチンの『われら』も、ドストエフスキーの『地下生活者の手記』や『カラマーゾフの兄弟』から大きな影響をうけていた。オーウェルは『われら』の世界に明確な全体主義の目的を見い出した。それ故『われら』を介してみれば、ドストエフスキーとオーウェルにおける権力の弁証の対比は、二〇世紀における大審問官的主題を浮彫りにすることができる。この主題は、ジョージ・スティナーがいうように（後述、第二章第一節参照）、天皇神話や中国の文化大革命やスターリン全体主義体制などの多くの事例にみられるように、なお現代に属している。そして現代日本の大衆と知識人の精神のなかに、無意識において巣くっているかもしれないのである。またソ連でも中国でも、それぞれスターリン、毛沢東という神話的英雄の死によってその全体主義のくびきからの解放のきっかけをえたという経緯は、地上に千年王国を打ち建てようという共産主義建設のイデオロギー的狂信がいかに民衆の精神の中に食いこみ、現実的指導層もいかんともしがたかったこと、共産主義建設神話の人格化としてのスターリン、毛沢東への宗教的な帰依の感情の政治技術学的な増殖がいかに巨大であったかということを示している。他方それはまた、千年王国的共産主義の狂信は強引な画一化と苛酷な支配を伴い、反抗と不満と批判に対する宗教的熱情の衣をまとったより一層の弾圧――拷問、監獄、銃殺隊、秘密警察、強制収容所、見世物裁判などの恐怖政治――を必須化することを教えたのである。私たちはその一端を、「跪拝の全体性の要求」という大審問官的主題のみに即して、スターリン体制を例にして考察することにする。（第三章「中間考察」）他方オーウェルは、この主題を、彼のスペイン戦争体験を出発点として三〇年代、四〇年代の全体主義体制の出来事を凝視することによって獲得していった。オーウェルの『一九八四年』は未来とか同時代の人々を待ちうけているものを書いたのではなく、ソ連やソ連支配の東欧諸国で既に厳然と存在しているものを示そうとした。『動物農場』ウクライナ版がドイツで出版されたと

き、アメリカ軍当局がこの出版物の大部分を没収してソ連の復員委員会に手渡したという経緯は、私たちの解釈を補強する歴史的事実の一つである。（グレーブ・ストゥルーヴェのオーウェル追悼文、『新しいロシアの風』一九五〇年二月一九日号、『思い出のオーウェル』所収）私たちは第四章で、このスターリンの全体主義の悪についてのオーウェルの認識過程を追跡しようと思う。そこには、オーウェルの政治思想の解明にとって重要な問題がたくさん含まれている。

二　大審問官とオブライエンにおける権力の弁証

(一)　イワン・カラマーゾフの壮大な劇詩――大審問官による権力の弁証――

イワンの「散文詩」は、異端審問時代の南国（スペイン）の都市セヴィリヤを舞台としている。「壮麗な火刑場」で、ほとんどまる百人に及ぶ「心あしき異端の徒」が「神のより大きな栄光のために（ad majorem gloriam Dei）」大審問官である枢機卿の手で焼き殺されたあくる日、キリストが十五世紀前と同じ人間の姿で再び現われる。民衆は彼が救世主であることを知り、愛と信仰の叫びをあげてキリストを迎える。その瞬間、「ほとんど九十に近い老人だがその目にはまだ火花のような光が宿っている」枢機卿が、護衛に再来したキリストを縛して神聖裁判所の地下牢に連れ去るように命じる。夜、独房の扉が開き、年老いた枢機卿が入ってきて囚われびとと向かい合う――お前はイエスか。答えなくてもよい、黙っているがよい。お前なぞに何も言える筈がない。わしにはお前のいうことが分り過ぎている位だ。それにお前にはもう昔言ったことに何一つ付け加える権利はないのだ。なぜお前は我々の邪魔をしにきたのか。キリストは終始無言であった。こうして大審問官の長い独白の劇詩がはじまる。それは人間が人間を完全に支配することについての首尾一貫した弁明であった。この大審問官の権

力の弁証は、人間性についての深い洞察と独自の歴史哲学に基づいていた。それはまた、神というよりも神の創造物に対しておこなったイワンの否定（「入場券を返す」）を正当化し、劇的形式において悪の形而上学を築く試みでもあった。

大審問官は、千五百年前イエスが荒野に導かれて悪魔からうけた〈試み〉を再び取り上げ、自由と幸福という永遠に和解することのない対立を明らかにする。大審問官の難詰は、荒野におけるイエスのきっぱりとした拒絶に向けられる。あの時、悪魔がイエスに対しておこなった〈試み〉の問いこそ、「人類の未来の歴史全体」を悉く予言し、「この世における人間の本性の解決しえない歴史的な矛盾」を全て集中していたからである。四〇日間断食したイエスにむかって、悪魔は、この裸の焼野原の石ころをパンに変えてみよ、そうすれば人類は感謝にみちた従順な羊の群れのようにお前のあとについて走りだすことだろう、と問うた。この悪魔の言葉に対して、イエスは、「人はパンのみにて生きるにあらず」と答えた。この時イエスが、なにをおいても言おうとしたのは、人間の精神的自由ということであった。人間から自由を奪うことはできない、服従がパンで買われたものなら、何の自由があろうか、と。だが――と大審問官は詰問する――、か弱く罪深い人間にとって、どうして自由と地上のパンが両立しうるのか。天上のパンのために地上のパンを黙殺することのできない何億という人間はどうなるのか。お前にとって大切なのは、わずか何万人かの偉大な力強い人間だけで、残りの海岸の砂粒のように数知れない人間たちは、偉大な人たちの材料として役立てばそれでいいと言うのか。彼らは、地上のパンを与える我々の前にひれ伏すだろう。

我々が彼らの先頭に立って、自由の重荷に堪え、彼らを支配することを承諾してくれたという理由から、我

々を神と見做すようになることだろう。それほど最後には自由の身であることが彼らには恐しくなるのだ。しかし、我々はあくまでもキリストに従順であり、キリストのために支配しているのだ、と言うつもりだ。彼らを再び欺くわけだ。なぜなら、お前を二度とそばへ寄せつけはしないからな。この欺瞞のなかにこそ、我々の苦悩も存在する。なぜなら、我々は嘘をつきつづけなければならぬからだ。

この〈パン〉の問題には、同時に、「この世界の偉大な秘密」、「全ての人間に共通する永遠の悩み」が含まれていた。それは、誰の前にひれ伏すべきか、ということに他ならない。自由の身であり続けることに耐えられない人間は、もはや論議の余地なく無条件に、すべての人間が心から信じていっせいにひれ伏すことに同意するような対象を求めて止まないからだ。こうして大審問官は再び詰問する。

お前は人間の自由を支配する代りに、いっそう自由を増してしまったではないか。それともお前は、人間にとっては安らぎと、さらには死でさえも、善悪の認識における自由な選択より大切だということを、忘れてしまったのか。人間にとって良心の自由ほど魅力的なものはないけれど、同時にこれほど苦痛なものもない。（中略）人間の自由を支配すべきところなのに、お前はかえってそれを増してやり、人間の心の王国に自由の苦痛という重荷を永久に背負わせてしまったのだ。

悪魔の次の〈試み〉についてもそうだ。悪魔が、神の子ならば、寺院の頂きから身を投げてみよ、と言った時、イエスは、神を試みてはならぬと拒絶した。また人々が、「十字架から下りてみよ、そうすればお前が神の

子だと信じてやる」と叫んだ時も、下りなかった。イエスは、人間を奇蹟の奴隷にしたくなかったからだ。奇蹟による信仰ではなく、自由な信仰を望んだからである。イエスが渇望したのは自由な愛であって、恐ろしい偉力で奴隷の歓喜を呼び起すことではなかった。だが——と大審問官は問う——、人間の本性は奇蹟をしりぞけるように創られているだろうか。奇蹟をしりぞけるやいなや、神をもしりぞけてしまうことを、イエスよ、お前は知らなかった。なぜなら人間は神よりも奇蹟を求めているからなのだ。お前は、弱い魂にあまりにも多くのものを要求しすぎたのだ。だから、「不安と混乱と不幸が、彼らの自由のためにお前があれほどの苦しみに堪えぬいたあとの、人間の現在の運命」が、もたらされたのだ。大審問官は、キリストの説く精神の自由が不安を、人間への尊敬が混乱を、人間への愛が不幸を生みだしたのだという。この逆説の認識あればこそ、大審問官は、「大切なのは心の自由な決定でもなければ愛でもなく、良心に反してでも盲目的に従わねばならぬ神秘」なのだといい、この神秘と奇蹟を教える権利を要求した。それは、人類の無知を認め、「あの恐ろしい贈り物」(自由)の重荷を軽くしてやり、たとえ罪深いことでさえ認めてそれを償ってやることによって、人類を愛するためであった。大審問官は、仕事は既に八世紀以前から着手されていると言う。「我々は、もう八百年もの間、お前を捨てて悪魔と一緒になっている。我々は彼から、お前が憤りとともに斥けたもの、つまり、彼が地上の王国を示しながらお前に薦めたあの最後の贈物を受け取った。ローマとシーザーの剣を受け取ったのだ。」「我々はお前の偉業を修正して奇蹟と神秘と権威の上にそれを築き直した。」教会が「教権」と手を結んだのは、あの力強い悪魔の第三の忠告を受け入れたからだ。人間たちが真底から求めている服従の味わいを与えてやるためだ。だれの前にひれ伏すべきか、だれに良心を委ねるか、どうすれば結局すべての人が論議の余地ない共同の親密な蟻塚に統一されるか、という人間の第三の、そして最後の苦しみから解放してやるためだ。こうして大審問官は、神に選ばれた人々のみ

に可能な、神に直接に参する絶対の自由というイエスの思想を、人間の名のもとに拒絶する。そう、人々が我々のために自由を放棄し、我々に服従する時こそ、はじめて自由になれるということを教えるのだ、と。服従の幸福、権威への尊敬、そこにこそ弱い魂にふさわしい自由がある筈だ——

永久に服従するということが何を意味するか、彼らはどんなに高く評価しても評価しすぎることはないのだ。そして、このことをさとらぬ限り、人間は不幸であり続けるだろう。その無理解をいちばん助長してきたのはだれか、言ってみるがよい。いったいだれが羊の群れをばらばらにし、勝手知らぬいくつもの道にちらばしたのだ。だが羊は再び集まり、再び服従する。今度はもう永久になのだ。その時こそ我々は、彼らに静かにつつましい幸福を、意気地なしの生き物として創られている彼らにふさわしい幸福を授けてやろう。そう、我々は彼らに結局、驕ってはならぬと説いてやるのだ。それというのも、彼らをお前がおだてあげ、その結果驕ることを教えこんだからだ。（中略）彼らは大喜びで我々の決定を信ずるだろう。なぜなら、その決定（罪を償い、良心の苦しい秘密を解決してやる決定）こそ、個人の自由な決定という現在の恐ろしい苦しみや、大変な苦労から、彼らを解放してくれるからだ。そして全ての人間が幸福になることだろう。彼らを支配する何十万の者を除いて、何百万という人々が全て幸福になるのだ。それというのも、我々だけが、秘密を守ってゆく我々だけが不幸になるだろうからな。何十億もの幸福な幼な子と、善悪の認識という呪いをわが身に背負いこんだ何十万の受難者とができるわけだ。彼らは静かに死に、お前のためにひっそりと消えてゆき、来世で見い出すものも死にすぎない。しかし、我々は秘密を守り通し、彼らの幸福のために天上での永遠の褒美で彼らを誘い続けるのだ。

幸福のために自由を否定する大審問官のイデオロギーは、人間を愛すると同時に軽蔑してもいる彼が無理に解決を得ようとして講じた手段であった。だがそれはまた、解決を断念する手段でもあった。イエスが自由であり超越的真理であったとすれば、大審問官は冷酷な歴史的現実の論理を代弁している。「人間の幸福の強制的な体系化」という独裁主義的な目標の基礎には、大審問官の歴史哲学があった——なぜなら、彼が囚われびとに率直に語ったように、福音書に書き記された奇蹟・神秘・権威の三つの問い、つまり荒野の知恵のある霊がキリストに対しておこなった三つの試みの中にこそ、「人間の未来の全歴史があたかも一つの完全な形に要約されたかのように予言され、この地上における人間性の解決されることなき矛盾のすべてが集約されている」からである。イエスは権力を拒絶したが、ローマの神権主義者はカイザルの剣を取り上げ、自らを地上の王者と宣言した。「我々はついにはその目的に到達し勝利を収め、カイザルになるであろう。そしてその時はじめて、人類の世界的幸福に意を用いることになるのだ」と大審問官は叫ぶ。ここには支配する者の自己断念がある。なぜなら統治(教導)階級の人々は善悪の認識から自由になることができず、それ故幸福になることを放棄しなければならないからだ。彼らが支配する数百万の人々はひたすら彼らの命令に服し、教えられたように天国と永遠の報いを信じて幸福のうちに死んでいくのに対し、彼らは善悪の認識の秘密を絶対に知られないようにしなければならない。彼らは歴史の論理の「受難者」である。こうして社会は、「数億の幸福な幼な児と数十万の善悪を識別する呪いを引き受けた受難者」とからなる。この大審問官の描く社会は、『悪霊』のシガリョフの提案を発展させたものといってよい。奇妙な社会主義のイデオローグであるシガリョフは、自由と専制という両極は実際には同一のものであり、無限の自由は無限の専制を通して達成されると考えている。そして、これ以外には「社会問題の最終的な解決方法」はないと信じている。この方法に従ってシガリョフは次のように提案する。人類を二つの部

分に分け、十分の一の人間が「絶対的な自由と残りの十分の九に対する無限の権利を享有する。そして残りの十分の九は個人としての人格を失って、動物の群れのようなものになって、限界のない服従の生活を続けているうちに何代かの再生を繰り返して、ついに原始時代そのままの罪を知らない境地に到着すべきである。これはまあ働くことは働きますが、いわば原始の楽園のようなものです。」シガリョフの、そして大審問官のこの恐るべき人類救済の公式（人間の幸福の強制的体系化による「万人の幸福な蟻塚」の建設）は、万人を全体主義的集団の子供のように無知で無邪気な一員とするであろう。それは、善悪の認識における選択の自由こそ人間性の本質であるというイエスの教えを歴史の真理の名において拒絶した大審問官の断念にも似たイデオロギーの帰結であった。

『悪霊』においてシガリョフが提示した全体主義国家の神話、そして自由意志の苦しみから人間を解放して奇蹟、権威、パンの支配のもとに地上に完全に統制された幸福の王国を建設するという大審問官のイデオロギーは、不気味なほどに正確に現代のある種の悲劇的な状況を照射している。ドストエフスキーその人は、キリストが真理の外にあることが証明されたとしても、なお真理とともにあるよりはキリストとともにあることを望み、バベルの塔という陰うつなシンボルで表現した無神論的社会主義の「地上の王国」建設にあくまで反抗した。パンで買われた幸福は動物的な満足に堕するであろうし、良心に加えられる強制は善を腐敗させるであろう。ドストエフスキーは、キリスト教的愛と強制に屈しない良心とに基づく真に人間的な自由の理念を、アリョーシャとゾシマ長老の言葉と行為とによって発展させようとした。だがアリョーシャは、イワンの無神論を、そして大審問官の悪の形而上学をどこまで論駁しえたのか、これは長い論議の的であった。逆に、大審問官伝説は二〇世紀現代史の悲劇をますます証明しているように思える。我々はG・ステイナーとともに、二〇世紀全体主義政治――と高度消費社会の背後にあるもの――のなかに大審問官的主題をさぐりあてることができるかもしれない――

「伝説」は不気味なほど正確に二〇世紀の全体主義体制――思想統制、エリートの掌握する生殺与奪の権力、ニュルンベルクやモスクワのスポーツ宮殿で行われる音楽や舞踊の祭典での大衆の粗野な喜びよう、自白強要制度、それに私生活の公的生活への全面的従属――を暗示している。しかし、「伝説」のエピローグともとれるオーウェルの『一九八四年』と並んで、大審問官のヴィジョンは、産業民主主義という言葉や外見の奥に隠された自由の拒否をも指摘している。さらにそれは、けばけばしい浅薄な大衆文化、厳しい真の思想を退ける大言壮語やスローガン、指導者や魔術師が現われて自由の荒野から自分たちの精神を導き出してもらいたいという人々の渇望――この渇望は東方に劣らず西方でもきわめて顕著である――などをも示している。「良心のこの上なく苦しい秘密からなにからなにまで――それこそありとあらゆることを彼らは我々のところへ持ち込んでくる。」(大審問官――引用者注)「我々」とは、秘密警察か精神病院のいずれかである。ドストエフスキーが生きていたら、おそらく、両者に共通する人間の尊厳に対する越権行為を見抜いたであろう……。(ジョージ・ステイナー「トルストイと〈大審問官〉」、前掲書『ドストエフスキーの「大審問官」』所収)

(二) 権力の司祭者たち――「権力の目的は権力それ自体である」、「拷問の目的は拷問それ自体である」(オブライエン)――

「薄汚れた地上的幸福のための権力の渇望」(アリョーシャ)という非難にもかかわらず、イワン・カラマーゾフの「大審問官」のイデオロギーには、ある種の権力(欲)の合理化があった。それは、これまで述べたように、自由と幸福のアンチノミーと逆説への洞察である。そして長い間、ここにこそ、権力を渇望する人間精神の最深の秘密、その権力の心理的合理化の根拠がある、と考えられてきた。しかしオーウェルは、全体主義政治のいき

つく先は何かを完全に認識するためには、このような正当化の巨大な衣裳と装置を作り上げ演出する党とその最高指導者の欲望の根源にまで、解剖のメスを入れなければならないと考えていた。煽動・騒動・危機などの「連続的熱狂」の演出による大衆の政治的動員、新しい人間性と完全な体制の創造をめざす「政治的メシア主義」（タルモン）、政治・経済・教育・宗教・文化・家庭の統制と全体的均一化の努力などを主要な特質とする全体主義政治は、しかしその構造と運動の背後に、権力の自己目的的な行使を最も重要な推進力としてもっていた。外部の敵と密通する内部の敵や、約束の地をめざすメシア的永久運動を攪乱する反逆者を不断に発見しあるいは創造する努力、これらの敵に対する憎悪の組織化、全ての行動を監視し、政治的熱狂から一時的にも息を抜くことも許さない厳格な統制と規律、これらの運動＝体制の根底にあるものは、敵に対する憎悪の自己増殖、党の規律の自己目的化である。オーウェルが、党規律の唯一の目的はより強大な規律であると論断したとき、かれが暴いたのは全体主義権力の自己目的的な行使という事態であった。ハンナ・アレントが、全体主義体制はメシア的王国においてではなく、死の収容所においてその真の姿をあらわすと書いたとき、彼女も同じことを指摘したのである。オーウェルは、この権力の自己目的化を支えるものは、根源的な衝動、それ自体としてしか説明できない欲望、つまり権力欲であると考えていたように思われる。彼は、権力は何ものかの目的実現のために機能的意味をもつという解釈を、平凡な——だが恐ろしい——真理を提示することによって打ち砕こうとした。

『一九八四年』の主人公ウィンストン・スミスは、苛酷な拷問と洗脳のための尋問のなかで、オブライエンに次のような質問をうける。君は日記に、「その方法は分る、しかしその理由が分らぬ」と書いたが、ゴールドスタインの禁書『少数独裁制集産主義の理論と実際』を読んだあと、その「理由」が分ったかどうか、と。「君も党が〝如何〟にして権力を維持しているかよく理解している筈だ。しからば、我々が〝なぜ〟権力にしがみつい

ているのか説明してくれないかね？　我々の動機は一体なんだろう？　我々はなぜ権力を望むのだろうか？　さあ、言ってみたまえ。」「ウィンストンの大審問官」であるオブライエン――その名 O' Brien はカトリックの司祭を連想させる（ケイス・アルドリット『ジョージ・オーウェルの形成』）――の狂気の熱情に圧倒されながら、ウィンストンはしばらく口を噤んでいた。オブライエンのいわんとすることはすでに察しがついていた。彼は、黙考のなかで、権力の弁証法にかんする「大審問官」の思想を反芻した――

党は権力のために権力を求めたのではなくて、大多数のためにそうしただけに過ぎないこと、民衆はか弱く卑屈な人種であって自由に耐えられないし、真実を直視しえないから、彼らよりも強力な集団によって支配され、組織的にだまされねばならないこと、人間にとっての選択は自由か幸福かであり、その大多数にとっては幸福は遙かにましなこと、党は弱者にとって永遠の保護者であり、善をもたらすために悪を行ない、他者のために自己の幸福を犠牲にする献身的な一派であるということ。

たび重なる拷問と洗脳によって既に気力が衰えていたウィンストンは、大審問官の権力合理化の思想を心のなかで繰り返しながら、しかしそれよりも恐しいことには、もしオブライエンが以上のような諸点を口にしたら自分がすぐにでも信用するだろうと想っていた。この世の現実がどのような状況にあるか、党がどのような欺瞞と残虐行為によって民衆を現状に釘付けしているか、オブライエンはなにもかも知り尽し計算して、すべて究極の目的のために矛盾を合理化しようとしているのだ。ウィンストンは絶望のなかでこの合理化を受け入れようとしていた。

「あなた方は、我々の幸福を考えて支配している」、「あなた方は一般の人間には自治の資格はないと考えてい

る、それ故に――」ここまで述べたとき、突然ウィンストンの体内に激痛が走った。オブライエンは拷問機械のダイヤルのレバーを三五度にひき上げながら、「何を馬鹿げたことを」と叫んだ。よろしい、代りに答えてやろうといって、彼は、権力の恐るべき真理を開陳した。それは、単純な真理であるが故に、「大審問官」の権力の弁証法をはるかに越えていた。

党はただ権力のために権力を求めているのだ。我々は他人の幸福などにいささかなりとも関心は抱いていない。我々は権力にしか関心がないのだ。富のためでも贅沢のためでも、また長生きするためでも幸福を求めるためでもない。ただ権力、それも純然たる権力のためなのだ。（中略）我々は過去のあらゆる少数独裁制とは根本的に違う。その限りにおいては我々は計算づくで行動している。我々以外の独裁者は、我々によく似ていた独裁者さえ臆病で偽善者だったにすぎない。ナチ・ドイツもロシア共産党も、方法論の上では我々のそれに極めて近かったが、しかし、彼らには権力追求の動機を口にするだけの勇気はなかった。彼らは不本意ながら、そして暫定的に権力を握ったのであり、しかも眼前に人間の自由と平等を実現する地上の楽園がきているような態度を装うか、あるいは本気にそう思い込みさえしたのであった。我々はそんな手あいとは違う。（中略）権力は一つの手段ではない、れっきとした一つの目的なのだ。何も革命を守るために独裁制を確立する者はいない、独裁制を確立するためにこそ革命をおこすものなのだ。迫害の目的は迫害それ自体にある。権力の目的は権力それ自体にある。拷問の目的は拷問それ自体にある。

我々は権力の司祭者だ。神は権力なのだ。（中略）まず最初に認識してもらわねばならないのは権力は集合

的なものだということだ。（中略）一人だけで――自由の身だと、人間は常に敗北を喫する。それも当然のことだがね。人間はいずれ死ぬ運命にあるし、あらゆる失敗のうちで、死は最高の失敗だろうから。しかし人間が完全に徹底的に自己放棄を行ない、自己だけの存在から脱却して党に合体し、自己即ち党ということになれば、彼は全能となり不滅の存在になるのだ。もう一つ、君に認識してもらいたい点は人間を意のままにできる力が権力だということである。肉体――いや、とりわけ精神を意のままにできる力だ。物質的世界――君のいう外在的現実――に対する支配は、さして重要な問題ではない。すでに物質に対する我々の支配は絶対的なものになっているからね。

（そのためには）服従だけでは充分ではない。相手が苦しんでいない限り、彼が自分の意志ではなくて当方の意志に従っているということが、一体どうやって確認できよう？　権力とは相手に苦痛と屈辱を与えることである。権力とは人間の精神をずたずたに引き裂いた後、思うがままの新しい型に造り直すということだ。（中略）常に権力への陶酔は存在するということだ。それは絶えず増大し、絶えず鋭敏になっていくであろう。常に、あらゆる瞬間において勝利のスリルが存在し、抵抗力を失った敵を踏みつけにする快感があるだろう。君が未来の世界を描きたければ、人間の顔を踏みつけるブーツを思い浮かべればよい――永久に踏みつける図を、ね。

ウィンストン、我々はあらゆるレベルで人生を管理している。君は人間性というようなものがあって、それが我々のやり方に反発し、我々に反逆するだろうと思っている。しかし我々は人間性まで創造しているのだ

よ。人間というのはどうにでもなるものさ。そうでなければ君はもしかしたら、プロレタリアか奴隷どもが蹶起し、我々を転覆させるだろうという古い考え方に戻ったのではないか。そんな考えは捨てたまえ。奴らは動物みたいに無力なのだ。人間性即ち党なのだ。

そんなことは不可能だ、恐怖と憎悪と残酷の上に文明を築くことはできない、とウィンストンは反論した。彼の最後の抵抗の根拠は、「人間の精神（The spirit of Man）」であった。彼はいまや、全能の権力の司祭者である党さえも打ち破ることができない何ものかの存在とその永遠性を信じたかった。「この世には何かがある――よく分らないが、何か精神的なもの、原理的なもの、あなた方が打ち勝てない何かがあるのだ」と。しかし――結局彼は敗北した。党に知的には屈服したとしても、党を憎悪している自分の感情、「内なる心」だけは保持し続けようとしたが、むだであった。オセアニアの「最後の人間」ウィンストンは、弾丸が自分の頭蓋骨を貫いた最後の瞬間、失われつつある意識のなかで「偉大な兄弟」を愛していた。

オブライエンとその党は勝利した。この勝利はしかし、「大審問官」の権力の弁証法に対するオブライエンの勝利を意味するであろうか。あるいは『一九八四年』の権力論は、『カラマーゾフの兄弟』のそれを越えたのか。フィリップ・ラーブは、そのすぐれた批評文の最後でこの問題を提出し、次のように述べた。

権力の心理のある側面においては、私は、ドストエフスキーの洞察の方がオーウェルの厳密なリアリズムよりも真に迫っている印象をもつ。オーウェルは、オブライエンの行動の考察にさいして、心理的な真実と客観的な真実とを区別できていないように思われる。全体的権力の真の性格を開示しているのは、まぎれもなくオ

ブライエンのほうであって、ドストエフスキーの大審問官ではないが、だからといって、オブライエンの個人的な心理の問題、つまり彼がこの赤裸々な真実を唯一の支えとして生きていけるかという問題が解決されているわけではない。また、彼もその一員である党エリートが、この真実によって長期間生きのびることができるとも考えられない。悪は善よりもはるかに、左右両翼が創りだす世界救済や強制的な幸福のイデオロギーによって容易に提供される擬似宗教的な正当化を必要としている。権力はたしかにそれ自体が目的であるが、大審問官たちでさえ、その権力は心地よいほど高貴高潔な他の目的に対する手段であるという虚構を信じるよう強制されているのだ。(P・ラーブ「『一九八四年』の書評」、『パーティザン・レビュー』一九四九年七月号、J・メイヤーズ『G・オーウェル―クリティカル・ヘリテイジ』再録)

悪の権力は、悪であるが故にそれだけ擬似宗教的正当化を必要としている、という洞察は鋭い。あらゆる権力は、みずからを、崇高なあるいは世俗的な他の何ものかに奉仕するための手段であるとして正当化しようとすることも、常套的な手法である。オーウェルが告発し、解剖しようとした全体主義体制は、ナチスやスターリンの神話にみられるように、大衆をイデオロギーのファナティズムにまきこみ、政治的に動員するのに成功したのであり、彼らは聖なる大義と地上の楽園の実現のための闘いに自発的に献身したのであった。死の強制収容所は、大衆を集団的熱狂へとかりたてる神話、イデオロギー、スローガンによって支えられていたのである。だが、オーウェルが問題にしたのは、ラーブとは逆に、このような正当化の衣裳のなかに隠された権力(者)の邪悪な本性であった。たとえば、レーニンの死に際しての葬送の儀礼的演出、レーニン廟の国家神殿化、公式伝記作者に諸民族の父にして万国のプロレタリアートの教師、さらに全知の神とさえいわしめた途方もないスターリン神

話の作成、党＝国家崇拝の体制化、「上からの革命」による共産主義建設の推進、内部の敵の告発キャンペーンと「人民の敵」という恐ろしいシンボルの操作とによる集団的狂気の体制化、たび重なる見世物裁判での自白の捏造による演劇支配制（テアトルクラシー）（ブランディエ『舞台の上の権力』）の完成、大ロシア・ショーヴィニズムと国家主義的感情の喚起による対外的憎悪の増殖、党員と人民に対する巨大な粛清（純化）とそれによる恐怖の体制化――このようなありとあらゆる方法によってスターリンとその共犯者が追求し固執したのは、目的としての権力それ自体であった。オーウェルがオブライエンの口をかりて明らかにしようとしたのは、私的な心理世界をとらえて離さなかった「客観的な真実」、つまり権力の目的は権力それ自体であるという真実であった。スターリンとその取りまきたちを支えていたのは、ラーブのいう「心理的な真実」、つまり「何らかの他の高貴高潔な目的」に奉仕するための手段として権力を掌握し行使するのだという心理的な正当化ではなく、やらなければやられるという激烈な権力闘争に伴う恐怖であり（例えば恐怖政治の司令部である内務人民委員部議長ヤゴダが殺られ、その下手人のエジョフが殺られ、そしてベリヤが殺られるというふうに）、永続粛清の論理であった。三〇年代に吹き荒れた「腐ったリベラリズム」告発の大合唱も、その指揮者が考えていたのは人民の幸福のためには自由を犠牲にしなければならないという大審問官あるいは『われら』の命題ではなく、スターリン路線の強力な担い手であったキーロフならびにキーロフ派政治局員、そして各級党指導部の人民との部分的和解を求める路線によって、権力の座を追われるかもしれないという恐怖であった（それが最も明白になったのは三四年一月の党大会並びに一一月の中央委総会であった）。党内の最後の希望ともいうべき和解路線を密かに葬り去るために秘密警察が演出したキーロフ暗殺劇に端を発する大粛清の波と、その大波のなかで乱発された「人民の敵」概念と「腐ったリベラリズム」概念はともに、目的としての権力それ自体の追求の結果なのであった。スペイン戦争での「もう一つの内戦」とそれに伴う

恐怖政治の経験、その経験と連動した「ロシアで何かがおこっている」という当時の知識人のなかでは例外的な予兆、そしてファシズムとスターリン独裁政治の恐ろしさについての認識、――これらの経験と認識の結果オーウェルが暴いたのは、権力の目的は権力それ自体であり、迫害の目的は迫害それ自体であるという冷厳な真実であった。「自由は屈従である」、「2＋2＝5」（五ケ年計画を四年で）、「権力は神である」という、ウィンストンも最後には屈服して承認した「二重思考」の論理や、「偉大な兄弟」への党員のエロス的感情の投射と、攻撃衝動の政治的組織化による敵への憎悪の自己増殖によるさまざまの運動の創出は、目的としての権力追求の無窮運動の不可欠な装置なのである。さまざまな正当化の「心理的な真実」は、逆に、権力渇望者の内奥の精神にうごめく権力自己目的化の欲望を飾る衣裳にすぎない。ウィストンのいわゆる「如何に（方法）」は、「なぜ（動機）」によって支えられているのである。これこそ、オブライエンの赤裸々な権力論によってオーウェルが明らかにしようとしたことであった。

三　中間考察・「跪拝の全体性の欲求」（大審問官）の勝利か

――ソヴェト・ロシアにおけるレーニン宗儀（カルト）とスターリン神話の形成――

既に述べたように、大審問官は、イエスの説く精神的自由が不安を、自由な愛が不幸を生みだしたのだという人類史の逆説を認識して、人間の心の王国に自由の苦痛という重荷を永久に背負わせたイエスの思想を人間の名のもとに拒絶した。そうなのだ――人々が我々のために自由を放棄し我々に服従するときにこそ、か弱い魂にふさわしい幸福があるのだ、と。『一九八四年』の主人公ウィンストンも、拷問のなかで党の権力の目的を尋ねられたとき、次のように黙考した。「民衆はか弱く、卑屈な人種であって自由に耐えられないし、真実を直視しえ

ないから、彼らよりも強力な集団によって支配され組織的に欺されねばならないこと、人間にとっての選択は自由か幸福かであり、その大多数にとっては幸福は遙かにましである」ということを。このような、とりわけ危機の時代における自由と幸福（地上のパン）の絶対的アンチノミーに直面する指導者、精神的自由の重荷に耐えられないか弱い民衆、そして人間的幸福のために民衆がその恐ろしい自由を放棄して、論議の余地なく無条件にひれ伏すべき教義と教権の創出を希求するという大審問官的主題を、オーウェルは、二〇世紀の全体主義政治についての認識のなかから発酵させていった。とりわけ彼は、この「薄汚れた地上的幸福のための権力の渇望」（アリョーシャ）の現代的形態を革命ロシアの理想を簒奪したスターリンと彼の党のなかに見い出した。この簒奪の過程で激烈な党内闘争がおこなわれたが、あの薄汚れた権力渇望家は、偉大な革命のカリスマの死の喚起する党員と民衆の宗教的感情を政治的に組織することによってこの闘争をかちぬこうとした。そして民衆が無条件にひれ伏すべき秘蹟と教権とを創出しようとした。

一九二四年一月二一日、レーニンは逝った。レーニンの死去は、儀礼の象徴作用の国家的組織化の幕開けとなった。また、レーニン崇拝の演出を介する一枚岩としての党の崇拝、さらに党機関（アパラチキ）と書記長スターリンに対する途方もない崇拝へと至る現代史の悲劇の開始日となった。レーニンの死に対して民衆は、悲しみのうちに心からの哀悼の意を捧げた。革命以来の幾多の悲惨と辛苦と失望にもかかわらず、多くの民衆にとっては、レーニンの名は革命の偉大な公約である自由＝平等な社会の理想を象徴していた。スターリンは、このような悲しみと不安に包まれていた民衆の眼に自分の姿を焼き付けるべく葬儀を入念に演出し、儀式のスポット・ライトを一身にあびようとした。スターリンは、レーニンの遺体を収めた棺側にぴったりと寄りそいつつ儀礼的警備につき、追悼の集まりでレーニンへの忠誠の誓いを読み上げた。この過度に演出された葬儀は、形式的儀礼を極度に嫌ったレ

ーニンその人の考え方にそぐわないにもかかわらず、民衆の心をレーニン崇拝へとかきたて、そのことによって反対派圧殺の呪縛力をもつ「一枚岩としての党」という恐ろしい観念を政治的に利用することをねらったものであった。また未亡人クルプスカヤの抗議と多くのボリシェヴィキのインテリの怒りにもかかわらず、レーニンの遺体は防腐措置を施され永久保存されて、「レーニン廟」に安置された。レーニンの死の儀礼と聖なるレーニンの〈国家神殿〉化は、しかし、革命以来宗教的本能を抑圧されていた国民の無意識の欲求にこたえることともなった。それはまた、西欧思想からの移植である純粋マルクス主義の精神的圧迫から多くの党員を解放し、ロシアの精神風土へ回帰することを可能にもした。

革命のもとで宗教的本能を抑圧されていた数千万の農民にとって、レーニン廟は巡礼の場所、風変りな無神論的信仰のメッカとなった。無神論的信仰にも予言者、聖者、聖なる墓場、聖像が必要だったのである。初期のキリスト教が異教徒の国々に伝教するさい、異教徒の信仰、儀式を形づくる要素を吸収してキリスト教の思想のなかに織り込んだのと全く同じように、西欧思想の産物であるマルクス主義は、ロシアに深く浸みこんでいるビザンチン的伝統とギリシャ正教的方式を形づくる要素を吸収しはじめていた。マルクス主義の抽象的教義は、インテリ革命家、とくに西ヨーロッパで亡命生活を送った人々の頭の中では純粋な形で存在することができた。だが、この教えが現実にロシアに移植され、大国民の考え方を支配しはじめてくると、今度は逆に教えの方がその国の精神的風土、伝説、慣習、習癖に同化せざるをえなくなった。この過程はしばらくの間、人目をひかずに進められた。だが、レーニンは誰よりもこの過程を見通し、不安を感じていた。レーニン自身の死は、純粋マルクス主義という精神的圧迫から彼の多くの弟子を解放する浄化法の役割を果した。（I・ドイッ

チャー〔上原和夫訳〕『スターリン――政治的伝記――』

このような科学的社会主義の宗教化の欲求は、一九〇五年革命の敗北に伴う思想的混乱以来、人類の共同の力で神を創ろうと努めた「創神派」、あるいは「社会主義的新宗教」を宣伝した「求神派」などの思想潮流として存在した。（メドヴェーデフ〔石堂清倫訳〕『共産主義とは何か――スターリン主義の起源と帰結――（下巻）』）レーニンとその党は、これらの潮流を厳しくしりぞけたが、にもかかわらず、集合的無意識として精神的地下水脈を流れるロシア民衆の宗教的欲求を抑圧することはできても除去することはできなかった。それは形を変えて党崇拝（党の〈教会〉化）、スターリン個人崇拝（全知・全能・至善の〈神〉としてのスターリン）を生みだす精神的基盤となった。レーニンの死の国家儀礼化は、このような欲求の精神的・政治的制度化をねらったものであり、その中心の演出家は、少なからざる古参ボリシェヴィキの知識人の反対にもかかわらず強行したスターリンその人であった。

第二回ソヴェト大会においてスターリンが読み上げたレーニンの死を悼む弔意と誓いの言葉は、ほとんど宗教的カリスマに対する反応であった。こうしていわゆる「レーニン宗儀（カルト）」が形成された。それ以降「マルクス＝レーニン主義」は、ある種の教会的な教義（ドグマ）や典礼となり、将来の途方もないスターリン神話創成の基礎となった。かつて人格形成期をギリシャ正教の宗教学校（チフリス神学校）ですごしたことのあるスターリンの誓いの言葉は奇妙に教会風の様式と口調を帯びていた。そこでは、「共産党宣言の文体とギリシャ正教祈禱書の文体」（ドイッチャー）が奇妙にもつれ合い、マルクス主義の専門用語が教会スラブ語の用語の上に重ね合わされている。その革命への呼びかけは、「教会合唱団のためつくられた連禱」のように響いている――

同志諸君、我々共産党員は特別に形づくられた人々である。我々は独自の素材から形づくられている。同志レーニンが創設し、指導した党の一員であること以上に崇高な使命はない。このような党の一員になることは全ての人には与えられていない。このような党の一員であることに伴う困難と嵐に耐え忍ぶことは全ての人には与えられていない。労働階級の子弟、貧困と闘争の子弟、信じられないような欠乏と英雄的努力の子弟、こうした人々こそとりわけこのような党の一員となるべきである。

我々のもとを去るにあたって同志レーニンは、我々に党員たる使命を高く掲げ、清らかに保つよう遺言した。同志レーニンよ、我々はこの遺訓を立派に果すことを貴下に誓う。

我々のもとを去るにあたって同志レーニンは、我々に党の団結を眼のひとみのように守るよう遺言した。同志レーニンよ、我々はこの遺訓を立派に果すことを貴下に誓う。

我々のもとを去るにあたって同志レーニンは、我々に共和国連邦を強化、拡充するよう遺言した。同志レーニンよ、我々は力を惜まずこの遺訓を立派に果すことを貴下に誓う。

我々のもとを去るにあたって同志レーニンは、我々に共産主義インターナショナルの原則に忠実なるよう遺言した。同志レーニンよ、我々は全世界の勤労者の同盟である共産主義インターナショナルの強化、拡充のため生命をもいとわないことを貴下に誓う。

我々のもとを去るにあたって同志レーニンは……(『スターリン全集』第六巻)

スターリンは、このような宗教的誓いの言葉による崇拝がレーニンその人とその思想を戯画化しているとは思わなかったであろうが、このレーニンの「教え」に対する誓いの「連禱」が響きわたるなかで夥しい数のレーニ

ンの写真、肖像画、全身像がソ連全土で掲げられ、あらゆる工場、高等教育機関がみずからの名称の上にレーニンの名を付け加える「改称の数週間」（シクロフスキイ「一〇月命名式」『レーニンと言語』所収）が過された。シクロスキイの指摘するように、言葉の宗教的儀礼化はレーニンの理論のドグマ化と思想の神聖化を強化した。スターリンは、新しいインテリの先鋭分子を養成していたスヴェルドロフ大学の学生や共産青年に対してみずからのレーニン主義の解釈を説明したさい、あたかも「人類救済のための一連の厳しい戒律」であるかのように提示した。このレーニン主義のひからびたドグマ化は、のちにマルクス＝レーニン主義の正統的解釈者、継承者としてのスターリンの思想の神聖化にとって不可欠のテコとなり、党内反対派と疲幣して不満や疑問をささやく厖大な民衆を〈異端〉として排除し、聖なるテロルによって抹殺する心理的正当化の武器となった。「特別に形づくられた人々」からなる党とその最高指導者の自己神聖化は、赤の広場の霊廟に安置されて象徴的に不死化されたレーニンの神格化を媒介にして押し進められ、ついには三〇年代に最高潮に達したように現実のあるいは潜在的な反対者や逸脱者（党と人民の敵）に対する異端審問・見世物裁判・粛清劇の舞台を提供した。この〈国家神殿〉（レーニン廟）はまた、毎年の〈国家的祝祭〉において、聖なる序列（イエラルシイ）として教権制的位階秩序をなす政治的官僚制（ポリトビューロクラティイ）が内部の最高幹部序列性を自ら儀式的に再演する(represente)舞台ともなる。なぜならこの再演(representation)は同時に分離・距離を意味し、従って位階秩序＝聖なる序列を設定することを意味しているからである。

四　オーウェルにおける全体主義の悪の認識

(一)　スペイン戦争における「悪夢の経験」からスターリン体制の認識へ

オーウェルにとって全体主義という新しい現象において重要なのは、一党独裁制のもとでの恐怖支配（テロル）と粛清、

党とその指導者装置の崇拝、イデオロギー的画一化の強制、歴史の捏造、「文化における反革命」（A・ノーブ）などだけでなく、この恐怖政治と巨大な嘘のピラミッドに直面したときの左翼知識人の思考と判断様式の異常な歪みであった。オーウェルは、暴力（秘察警察）をうしろ立てとする権力と知の聖なる序列（イェラルシー）と、それを正当化するイデオロギー的司祭とに我慢がならなかった。既に述べたように、彼は、このような全体主義政治についての認識の端緒をスペイン戦争経験と三〇年代後半ならびに四〇年代のソヴェト・ロシアの現実とからえた。第二次世界大戦の緒戦ともいうべきスペイン戦争は――その歴史的要因はおそらくスペイン政治史の遠い過去にまで遡ることができるが、より直接的には――一九三一年の共和国成立以来の複雑にして激烈な政治闘争に根差す特殊性と、三〇年代の国際情勢を反映する一般性とがからみあって勃発した。それは、とりわけ政治諸党派と労働組合の「頭文字の万華鏡」が織りなす政治的戦争という性格を帯びていた。危機的な国際政治の力学を反映したイデオロギー絡みのこの戦争は、外国の多数の知識人やコミュニストの熱狂的な関心をかきたて、彼らは外国人義勇兵の国際旅団――それは「貧弱な武装」にもかかわらず、「少なくとも比較的まともなものを守るために野蛮に対抗して戦った」（オーウェル）――に結集して共和国の防衛のために英雄的に闘ったが、同時に、この戦争の過程で露わになったイデオロギー政治の恐ろしさは、多くの知識人の理想主義と未来への政治的希望とを瓦解させた。スペイン戦争という偉大な「経験の学校」（オーウェル）はまた、公正で平和な社会への希望と信念を挫き、癒し難い幻滅をもたらしたのである。つまりスペイン戦争は、スペインの民兵と外国人義勇兵をとらえた平等と人間的連帯の欲求や純粋な理想主義の証しであると同時に、政治的反対派に対する残酷な暴力と暴力の使用を正当化するイデオロギー支配の怖しさをも教えたのである。

オーウェルにとってもスペイン戦争体験は、彼の社会主義への信念に生命を吹きこむと同時に、社会主義の未

来に対する不信の種を植えつけることとなった。とくにバルセローナにおいて、共産党勢力とアナキスト・POUM（統一マルクス主義労働党）との間で戦われた「五月の三日間」の市街戦とその後の恐怖政治の経験を振りかえって彼は、「一生のうちでこれほど耐え難い時期もなかった。思うに市街戦のあの呪わしい数日間ほど腹立たしく、幻滅させられ、しまいには神経を痛めた経験というものは少ない」と述べている。（『カタロニア讃歌』）だが彼は耐え難い幻滅に意気銷沈しただけではなかった。スペインでえた「人間らしさへの信念」をもって恐怖政治の現実をイギリスの公衆に対してあきらかにしようとした。将校も一兵卒も対等な真に民主的な原則で組織されていた労働者民兵制度の解体、特権将校とか大幅に給料の差のある階級制の「人民軍」の創設、軍の統一と監督並びにソ連と共産党による全面的統制の主要な装置としての政治委員（コミッサール）制度（赤軍モデル）の導入、アナキストや独立左翼諸党派に対する容赦のない弾圧、絶えまなく展開されているスパイ行為、大量逮捕と裁判なしの集団投獄、新聞に対する検閲と発行停止、途方もない「トロツキー――ファシスト」陰謀の捏造、偽造せるファシストあるいはフランコの「第五列」としてのトロツキスト攻撃、イギリスの反ファシスト系新聞の事実の隠蔽等、オーウェルはスペインで目撃した「最も恐ろしい欺瞞」（V・ゴランツ宛手紙、一九三七年五月九日）を告発し続けた。また彼は、バルセローナやアラゴンの前線にいたときでも、また秘密警察の追求を逃れて命からがらピレネーを越えて帰国したあとでも、イギリスの言論界と世論を支配している「親共産党的検閲」やそのもとでの恐るべき欺瞞の流布と闘った。彼は多数の論説や手紙、書評――それらの文章はかれの見事な散文の一例でもある――において繰り返し親共産党的知識人や左翼ブッククラブによる事実の隠蔽と偽造を指摘し、スペインでの経験の真実を語り続けた。

オーウェルは、その散文の精神が示すように、物事をあるがままに見ようと努めた人だった。既成の「正論」

や「イズム」の色眼鏡を通して事実を隔蔽したり改変したりして、その結果巨大な嘘の体系を築き上げることにどうしても我慢がならなかった。スペインにかんする原稿を求めながらPOUM弾圧の記事と分ると掲載を拒否し、F・ボルケナウの『スペインの戦場』の書評を求めながら再びそれを拒否した『ニュー・スティツマン』誌などの言論界の組織的な事実隠蔽に抗議の声をあげながら、裁判もなく投獄・粛清され、「フランコの第五列」として組織的に中傷されている人たちのために、あくまで「正義」を求めようとした。(例えば、レイナー・ヘップンストールへの手紙、一九三七年七月三一日、ジェフリー・ゴーラーへの手紙、一九三七年九月一五日、ジャック・コモンへの手紙、一九三七年一〇月、『タイム・アンド・タイド』編集長への手紙、一九三八年二月五日、レイモンド・モーティマへの手紙、一九三八年二月九日、フランク・ジェリネックへの手紙、一九三八年一二月二〇日など)そして、自分たちの党の不可謬性を盲目的に信奉して悪しきプロパガンディストに成りさがりがちな共産党系知識人の精神的荒廃、しかもこのような〈党派性の精神的奴隷〉という事態をいささかも疑おうとはしない恐るべき〈誠実さ〉を決して見逃そうとはしなかった。オーウェルが『カタロニア讃歌』や「スペイン民兵についてのノート」、「スペインの内幕を暴く」、「スペイン戦争回顧」などを含めた多数の散文で訴えようとしたのは、全体主義政治の恐怖だけでなく、現実を直視し考えるわざ(アート)の大切さであり、事実を隠蔽・捏造して巨大な嘘の体系を作り上げるという思考様式と精神的態度そのものこそが、例えばスペイン内戦のもう一つの悲劇をもたらしたスターリン主義の恐怖政治を生みだすのだという洞察であった。

オーウェルは当時、スペインでなにがおこったのかは知っていたが、なぜおこったのかはよく分らなかった。以後彼の政治思想は、スペインでの悪夢のような経験と恐ろしい欺瞞の背後にあるものは何かの探求に向かうこととなる。もちろん当時においてもオーウェルは、「トロツキスト」という「恐ろしいコトバ」の乱発による恐

怖政治が、ソ連の武器援助と国際旅団や「第五連隊（共産党の民兵部隊）」のマドリッド防衛における劇的な貢献とによって共和国政府と軍のなかで共産党の影響力が増大し、共和国の政策がモスクワの指示に従属させられた結果であることを認識していた。「ロシアから武器がはいってくるという事実によって、共産主義者は権力を握った。まず第一に、ロシア製の飛行機と小銃、それに国際旅団のすばらしい戦闘能力は、共産主義者の威信をおおいに高めた。しかしさらに重要な点は、ロシア人は武器の代価を受け取るだけではなく、その条件も強要できたこと、最も露骨に表現すると、その条件というのは、〈革命をつぶせ、さもなければ武器はやらない〉ということであった。このような態度をロシアがとった理由として普通あげられているのは、もしロシアが革命をそそのかしているように思われたら、フランス・ソヴェト協約（それに期待されている大英帝国との同盟）が危くなるということである。また、スペインにおける真の革命の姿が、好ましからざる反響をロシアに引き起こすかもしれないということであった。」（「スペインの内幕を暴く」）こうして、政治委員制度（コミッサール）を導入した人民軍と同様、共和国の公安機関もソ連と共産党の統制下に組み込まれるようになった。そのなかで「フランコの第五列」という政治語彙が乱用された。一九三六年一〇月末にフランコ軍のモラ将軍が四列の部隊でマドリッドに総攻撃をかけ、市内の「第五列」の支援者もこれに呼応して立ちあがるであろうと宣言したとき、この政治語彙は国際的な流通語となった。この「第五列」を取締ったのが、内務省の一部局をなし人民戦線諸党から各セクションが構成されていた秘密警察であった。共産党セクションは、ソ連内務人民委員部のスペイン代表オルロフによって統轄され、多数の経験をつんだ委員を擁して秘密警察全体を支配するようになった。（E・H・カー『コミンテルンとスペイン戦争』）共産党指導の秘密警察がフランコの「第五列」を摘発している限りは、誰も抗議はしなかったが、この弾圧装置はまもなく他の政党にむけられ、共産党によるテロル支配の主要な武器となった。この恐怖支配の最初の不吉な

兆候は、同年十二月の共産党によるカタロニア州の自治的な「ジェネラリタート」（選挙制の会議）からのPOUMの追放であった。POUMの指導者アンドレス・ニンとマウリンは、スターリン体制を批判し、モスクワとコミンテルンの権威を全面的に否定し、スペイン内乱に対しても革命を通じてファシズムを打倒する方針を堅持して、人民戦線路線と対立してきた。共産党はPOUMに「トロツキスト集団」というレッテルを貼り、残忍な迫害にのり出した（そしてA・ニンもマウリンも虐殺された）。のちにみずから恐怖支配の現実に遭遇して命からがらスペインを脱出しなければならなかったオーウェルは、この「トロツキスト」という「恐ろしい言葉」が何を意味しているかを問うて、その「裏切り者」「人民の敵」攻撃が「XYは世界革命について好意的に話していた、故に彼はトロツキストである、故に彼はファシストである」という奇怪な三段論法の命題に支えられていることをあきらかにした。（「スペインの内幕を暴く」一九三七年になると、共産党とアナキスト（CNT＝全国労働連合とFAI＝イベリア・アナキスト連盟）は、POUMとアナキストの民兵への武器の分配の差別をめぐって衝突し、相互の憎しみが増大した。こうして共産党とソ連の統制下におかれた公安部隊はアナキストを逮捕し暗殺しはじめた。このようなPOUMやアナキストに対する迫害は、一九三六年八月と三七年十一月のジノヴィエフとカーメネフ、ピャタコフとラデクに対するモスクワ粛清裁判と密接に関連していた。オーウェルは、この当時、この関連を認識していた数少ない知識人の一人であった。彼はある書評において次のように述べている。「人民戦線のあらゆる策動は、仏露同盟と過去数年のコミンテルンの方向転換とに密接につながっている。ここに大問題が横たわっている。人民戦線が議論される時にはいつも多かれ少なかれそれが問題になるが、前面に押し出されることは少ない。それは、ソヴェト連邦に起っている巨大なしかし不可解な変化の問題である。」（フェナー・ブロックウェイ『労働者戦線』の書評、『ニュー・イングリッシュ・ウィークリー』一九三八年二月十七日）

いま、「ソヴェト連邦で実際に何が起っているのか」、スペインにおける悪夢のような体験をふまえてオーウェルは問うた。その問いは必然であった。左翼の道徳的良心であり続けようとしたオーウェルは、一九三八年春から翌年の春にかけて左肺の結核患部の激しい出血によって余儀なくされたケント州とモロッコでの療養生活のなかで、とくにスターリン体制を焦点としつつ、抑圧の再生産体系としての現代の全体主義国家についての思索を深めた。それは、スペイン戦争にまつわる「恐るべき欺瞞」がなぜ起ったのかを探求する過程において避けることのできない課題であった。このなぜの探求は、既に述べたように、なにが起ったのかの経験に基づいていた。そしてスペインのもう一つの悲劇の背後に、ソヴェト連邦で吹き荒れた粛清の嵐があったことを知るようになった。これは、ソ連に対する一種の国家主義的忠誠とスターリン崇拝の波が高まっていた同時代のイギリスにおいては例外的ともいえる認識であった。彼はこの認識の過程でたくさんのことを学んだ。しばらく後の回想によって整理すれば、彼の「なぜ」と「何」をつなぐ結節環は次のようなものであった——

スペインのこの人間狩りは、ソヴェトでの大粛清と時期を同じくして行なわれたものであり、一種の付録であった。スペインの場合もロシアと同じ罪状（すなわちファシストと通じた裏切り）によって告発されたのであるが、スペインにかんするかぎり、私はいくらでもこの告発が虚偽であったと言うことができる。こういう経験はすべて貴重な実物教育であった。おかげで、私は全体主義のプロパガンダが、民主主義国においても進歩的な人々の思想を容易に左右し得るものであることを学んだのである。

妻も私も、罪のない人々がただ異端の嫌疑だけで投獄されるのを見た。しかしイギリスへ帰ってみると、分別もあれば知識もある多数の人々が、この内戦を見ていて、モスクワ裁判から伝えられる反逆だの裏切りだの

サボタージュだのという馬鹿らしいニュースを信じているのを知ったのである。

こうして私は、ソヴェト神話が西欧の社会主義運動に及ぼしているマイナスの影響を、今までになくはっきり理解したのである。(『動物農場』ウクライナ版への序文」一九四七年三月)

オーウェルにとって、スペインにおけるいたましい「付録」を理解するためには、モスクワ裁判や大粛清を含めてロシアに何が、そしてなぜ起っているのを知ることが緊要となった。「とにかくスターリン体制の現実が、それをつかみ得る限りで第一要件」であった。彼はまっすぐに問題を提起した――「それは社会主義か、それとも国家資本主義の奇妙にねじけた形なのか。過去二年間、世の中を惨憺たるものにしてしまった政治論争の全ては、じつのところこの問題をめぐるものなのである。」(ユージン・ライアンズ『ユートピアの課題』書評、『ニュー・イングリッシュ・ウィークリー』一九三八年六月九日) 彼は、ソヴェト連邦に千年王国的理想を見、スターリン崇拝に酔いしれていた左翼知識人を厳しく批判しつつ、「いやなこととまっすぐに向きあう力」をもって、汚された理想を欺瞞的にとりつくろうソヴェト全体主義を認識しようとした。それは、つまるところ「慈悲深い独裁政治など信じられないし、それに独裁政治を擁護するような人間の誠意も信じられない」からであった。(A・ツヴァードリング『オーウェルと社会主義』) 彼はこの時期、ソヴェトとナチス国家についての分析や、楽園を期待してソ連に出かけながら逆に恐怖にあえぐ国家を見てしまった――そしてその真実を語ろうとした――人たちの報告を精力的に読み、書評した。オーウェルは「五万の蓄音機が同じ旋律をかなでている」時に、なお「人間の声」をあげようとしたボルケナウの『世界共産党史』から「最もよい励まし」をえた。バートランド・ラッセルの、『権力』から彼は、「独裁者たちが頼りにしている組織された嘘の巨大な体制」、「支配カーストが自らを欺くこ

となく、自らの支持者を欺すことのできるような国家」について理解を深めた。ラッセルは、イデオロギー的狂信者の支配する社会では必ずや人間性が失われると強調した。「狂信者だから彼らは苛酷になる。苛酷になれば反抗を受ける。反抗を受ければ一層苛酷になる。彼らの権力衝動は、自分自身に対してさえ宗教的熱意の衣をまとい、押えがきかなくなる。従ってそこには拷問と火刑、ゲシュタポとチェカがでてくるのだ。」（ラッセル『権力』）ラッセルの本と同年（一九三八年）に出版され、ともに先駆的な全体主義の研究であるフォウクト『カエサルに』は、メシア信仰的要素に色彩られたソ連の「社会主義」が「非人間的抑圧と相容れないものではないし、じつのところ極端な経済的不平等とも両立する」ことをあきらかにした。地上に天国を打ち建てようという試みは、「決まって強引な画一化を伴うもので、それは戦争、恐怖政治、監獄、強制収容所、銃殺隊、絞首台といったものによってのみ人類に適合させることができるのだ」というのである。（ツヴァードリング『オーウェルと社会主義』）また、一九二八年―三四年にＵＰＡ（合同通信社）の記者としてイギリス共産党の推薦により派遣され、期待に胸をふくらませてロシアに行ったが、戦慄すべき現実を見てしまったユージン・ライアンズは、『ユートピアの課題』（一九三八年）でその真実を語ろうとした。それは、オーウェルの言うように、多くの西欧の社会主義者によるソヴェト社会主義とスターリンへの学問的、イデオロギー的ラブレターがはんらんした当時にあっては本当に勇気のいることであった。オーウェルは、療養所のなかでライアンズのスターリン体制の思慮深い分析を読み、「五ヵ年計画を四年で」という魔法のスローガンと「２＋２＝５」という世界を愚弄する算術の背後に存在する現実に注目した。

ライアンズ氏がロシアで過した数年はひどい困難な年月であって、一九三三年のウクライナ飢饉でその絶頂

に達し、そのため三〇〇万を下らないと推定される数の人々が飢えて死んだ。現在は疑いなく第二次五カ年計画が成功して物質的条件はよくなったが、社会の空気が大きく変ったと考える理由はなさそうである。ライアンズ氏が描く制度はファシズムとさして違わないように見える。全ての実質的権力は二〇〇万から三〇〇万の人々の手に集中され、都市のプロレタリアは名目上革命の後継者であるが、ストライキをする基本的権利まで奪われている。ごく最近では国内の旅券制度の導入により、彼らは農奴に似た地位にひきもどされた。G・P・Uはいたるところにいて、全ての人々はたえず告発を怖れながら生きている。言論と報道出版の自由はほとんど我々の想像のつかぬまでになくされている。恐怖の波が周期的におこり、ある時はクラークやネップマンの「粛清」、ある時はなにかものすごい国家裁判があり、何ケ月も監獄にいた人々が突然法廷に引き出されて信じ難い自白をし、一方その子供は新聞に論説を発表して「私は父をトロツキストの蛇として拒絶する」と言う。その間、見えざるスターリンはネロも赤面するような言い方で崇拝される。こういうことが――もっと詳しく――ライアンズ氏の描き出すところであり、私は彼が事実を誤って表現しているとは思わない。（ユージン・ライアンズ『ユートピアの課題』書評、『ニュー・イングリッシュ・ウィークリー』一九三八年六月九日）

同年末、オーウェルは、再びソヴェト体制についての本を書評するなかで、再び「大審問官」伝説と『一九八四年』の主題に通ずる現代独裁制の恐るべき本質を剔抉した。彼は、それは人類史上全く新しい何かではないか、という予感におののいた。あらゆる抵抗を抑圧するだけではなく、また被支配者の独立と自由の最小限の砦さえ破壊するだけでなく、組織的な人民教化によってそもそも自由を願わないような人々を作り出しているのではないか、あるいはまた粛清裁判で頂点に達した「人民の敵」殲滅の大合唱とスターリン崇拝の集団的狂気のな

かでみずから精神的自由を放棄する人々を生み出しているのではないか、それは「魂の改造」の壮大な試みなのかもしれない、と思えたからである。

現代の独裁政治にまつわる恐ろしさとは、その独裁が過去に全く前例のないものであるということだ。現代独裁政治の行きつくところは予知できない。過去においては、すべての専制政治は遅かれ早かれ転覆されるか、あるいは少なくとも抵抗を受けるものであった。「人間の本性」とは、当然自由を望むものだからである。だが我々は「人間の本性」が不変のものだとは絶対に確信できない。自由を要求しないような人間たちを作り出すことも、角のない牛を作り出すのと同様に可能かも知れないのである。宗教裁判は失敗したが、宗教裁判には現代国家の手段がなかった。ラジオ、新聞の検閲、規格化された教育、秘密警察が事態を一変させてしまった。大衆暗示はここ二〇年間の科学となっているが、それがどの程度成功を収めるか我々はまだ分かっていない。（N・ド・バジリー『ソヴェト支配下のロシア』書評、『ニュー・イングリッシュ・ウィークリー』一九三九年一月十二日）

(二) 転移ナショナリズム（代替信仰）と権力崇拝の批判

オーウェルは、イギリス左翼の大多数の人々のソ連崇拝に抗して、ソヴェトでおこっていることを是認しなかった。それ故に彼は、モスクワ裁判や独ソ不可侵協定（二つの全体主義国によるポーランド分割の約束）が多くの社会主義者にもたらした良心の危機に陥らなくてすんだ。これらの良心的社会主義者にとって、ヒトラー―スターリン協定という権力政治のシニシズムと日和見主義は悪夢であるどころか理解を絶するものであった。それは一

〇年にわたるソ連の反ファシスト政策に対する全面的裏切り行為であった。一九三〇年代に登場した作家たちは、金利生活者的資本主義の黄金の午後に「生の倦怠」を謳いながら「神々の黄昏」（西欧文明の退廃）を嘆き「無意味の崇拝」にふけった二〇年代の作家たちとは異なって、ヒトラーと不況によって粉砕された生の目的と民主主義擁護のために政治に参加した。「単に個人の生活のみならずその価値の全体系もが絶えず脅威を受けるような世界」に生きた彼らは、純然たる唯美主義の幻想のなかで「死の病」に美的関心を抱くわけにはいかなかった。彼らにとって文学は政治的にならざるをえなかった。「ファシズムと社会主義が互いに争っている世界では、少なくとも考える人間はいずれかにくみせざるを得ず、その感情は彼の作品ばかりでなく彼の文学的判断にも表われざるを得なかった」からである。（「芸術とプロパガンダの境界」）その結果三〇年代文学は、どの芸術作品にも意味と目的（政治的・社会的・宗教的目的）があるのだ、我々の審美的判断はいつも我々の偏見や信条によってゆがめられているのだということを明らかにし、芸術のための芸術を引きづり降ろすことになったが、他方しかし、左翼正統理論と権力政治の袋小路のなかで精神的誠実の維持に苦悶した。粛清とか秘密警察、裁判ぬきの投獄、即決処刑といったさまざまの恐怖を看過できたとしても――そんなことはあってはならないことだが――、正統路線の規律と知的誠実との分裂のはざまでもがき苦しんだのである。ロシア崇拝という代替ナショナリズムにどっぷりつかっていたパブリック・スクール出の「万年未成年の理論」家たち（シリル・コノリー）を別にすれば、左翼作家のなかでも良心的な人々は、政治によって強いられた精神的スラム化あるいは「精神的プロレタリア化」（M・ウェーバー）の状況に直面した。なぜなら彼らは、ソヴェトの国家理性の観点からおこなわれる強引な路線の修正とか、激烈な党内権力闘争による粛清、告発、政党文献の体系的破壊とか、「月曜には疑問の余地のない教条だったものが火曜には許し難い異端になりかねない」（「鯨の腹の中で」）といった事態のなかで、「ロシ

アの広告代理人」の党員、理論家、作家のようにこのような現実を常に国際的社会主義の観点から弁明し、正当化して精神的スラムに陥いるのでなければ、知的誠実を守るためにその最も根本的な信念を変更するか離党するかの必要に迫られたからである。オーウェルはこの精神的経緯を次のように解剖している。

当時の無数の若い作家たちの前にひらいていた唯一の思想体系は、公式的マルクス主義でした。それはロシアに対する国家主義的な忠誠を要求し、自らマルクス主義者と称する作家を権力政治の不誠実にかかわり合わせたのです。しかし、かりにそれが望ましいものであったにしても、これらの作家たちの依存した仮説は、いきなり独ソ協定によって粉砕させられました。ちょうど一九三〇年頃の多くの作家たちが、現実にその当時の出来事から身を避けられないことを悟ったように、一九三九年頃の多くの作家たちは、現実にその知的誠実をある政治的信条のために犠牲にできないことを――少なくともそうなっては作家としてとどまれないことを、悟りつつあったのです。（「芸術とプロパガンダの境界」一九四一年四月三十日、BBC海外放送講演）

オーソドクシーの信念体系の使徒行伝につらなることを拒否してきたオーウェルは、「正統路線」からの逸脱に対する大小の異端審問官たちの激越な批判にも、またこの当の正統路線が「時を選ばずあっというまに変えられてしまう」日和見主義にも驚かなかった。彼が憂慮したのは、事実の捏造と過去の改変によって客観的真理という概念が破壊されてしまう事態であった。客観的な歴史の抹殺に知識人が手を貸すことであった。そしてまた、ソヴェト体制を批判することは、「客観的には」ファシストのプロパガンダとして利用され敵を利することになるという口実のもとで、真実を隠蔽すること、そして今度はその敵と手を結ぶことを正当化する順応主義で

あった。このような疑惑は、既に述べたように、スペイン戦争の経験に胎胚していた。それは、「将来の歴史は夥しい量の誹謗と政党のプロパガンダ以外に依拠すべきものをもたないであろう」という怖れであった。(『讃歌』)その意味ではオーウェルの未来に対する絶望は、良心の急激な危機のなかで苦悩し共産党を離脱したイギリスの左翼知識階級の人々に劣らず深かった。その絶望の念を、重要なエッセイ「鯨の腹のなかで」(一九三九年)とディケンズ的作品と好意的な批評をもって迎えられた小説『空気を求めて』(同)のうちに記している。

戦争があってもなくても、非常にはっきりと起っていることは、自由放任制資本主義と自由主義的キリスト教的文化の解体である。このことの意味は最近まで十分に見通されていなかった。というのは、社会主義が自由主義の空気を保ち、さらに広げるであろうと一般に考えられてきたからである。この考えがどんなに間違ったものであるかは、今になってはじめて自覚されようとしている。ほぼ確実に、我々は全体主義的独裁制の時代に入っていこうとしている。その時代にあっては、思想の自由は死に値する罪であり、やがては抽象概念になるであろう。自律的個人はその存在を抹殺されるであろう。(「鯨の腹のなかで」)

我々が転落していく世界、それは一種の憎悪の世界(hate-world)、スローガンの世界だ。色シャツ、鉄条網、ゴムの棍棒。夜も昼も電灯がついて、君の眠っている間も刑事が監視している秘密の監房。そして行進と巨大な肖像を画いたポスター、百万の群衆が耳がつんぼになるまで指導者に歓呼の声を送り、自分たちは本当に彼を崇拝しているのだと思い込む。しかしいつも腹の底では、ヘドを吐きたくなるほど彼を憎んでいる。なにもかもそのようになろうとしている。それとも、そんなことは起らないのであろうか。ある日、私はそんな

ことは不可能だと思う。が他の日には、それは不可避だと思う。（『空気を求めて』第三部）

だがオーウェルは、「神殿宗教」に対して血みどろの弾劾演説をおこなった（バビロン捕囚期前の）「禍の預言者（Unheilsprohet）」エレミア（『エレミヤ書』第七章、第二六章）であっただけではない。たしかに彼は、個人の自律の全面的敗北という恐るべき可能性について警告し、三〇年代知識人の知的誠実と責任感の崩壊を批判し、自由な文学が不可能となるような全体主義社会の出現を予言した。と同時に、彼は、「イスラエル民族」の地盤からさえ自由になった諸個人がその主体的決断を以てする「新しき契約」を説いたユダ王国滅亡（第二捕囚期）後のエレミヤでもあった。「一人一人が、これからは〈心に記す新しい契約によって生きていくのだ〉。だから職業的宗教家が、あなたの主を知りなさいと宣伝する必要はない」のだ。（『エレミヤ書』第三一章三一―四節）　オーウェルは、「正統思想の有無に目くじらを立てる人間」、「自分の非正統性に良心をビクつかせている人間」（「鯨の腹のなかで」）ではなかった。彼の文章には、「怯えていない人間」のもつある種の精神のおだやかさがある。怒っている時でも、その基礎には人間らしさ（ディーセンシー）への意志がある。彼の「未来に対する主な希望は、普通の人々（コモン・ピープル）は決して彼らの道徳律を捨てないであろうということ」であった。（ハンフリー・ハウスへの手紙、一九四〇年四月十一日付）この普通の人々の「普通の生活」に息づく人間的品位の感情とそれへの共感能力こそ、オーウェルの「新しき契約」の思想内容であった。それは、権力のコトバに抵抗するオーウェルの散文の精神の核心にあるものであった。彼は、このような庶民のありふれた生活世界のなかにある人間的でまともな心（セイン）と知識人の自由な知性とを併せもっていた作家こそディケンズであったという。オーウェルによれば、ディケンズが彼の時代でも現在でも人気作家であり続けているのは、「こっけいで単純化された、したがって記憶に残る形で庶民の生得の立派さを表

現することができた」からである。そういうときオーウェルは、ディケンズに託して自分の思想の自画像を描いているといってよい。例えば、ディケンズは理想的にはどのような顔をしていたかという有名な言葉は、無意識的な彼の自画像である。

> さてディケンズの場合、その顔は写真の顔に似てはいるが、そっくりそのままという訳ではない。それは四十歳がらみの、小さなあごひげのある、ハイカラーをつけた男の顔である。彼はやや怒りをこめて笑っているが、その笑い方は勝ち誇ってもいなければ悪意もない。それは常に何ものかと戦っている人の顔であり、怯えずに堂々と戦う人の顔であり、寛大さをもって怒っている人の顔である。別の言い方をすれば、その顔は一九世紀の自由主義者を示し、束縛されない知性を示していて、われわれの魂を獲得しようと戦っている矮小でいかがわしい正統派のすべてから、われわれと同じくらい憎まれるタイプの顔である。(「チャールズ・ディケンズ」一九三九年)

オーウェルは正統的教義の独占的解釈者(司祭団)に対して「寛大な怒り」をもって闘った。彼は冷酷なまでに理論に取り憑かれ「無意味な異端狩り」に狂奔する人々に対する嫌悪感を隠さなかった。オーウェルがソヴェト・ロシアについてしばしば用いた比喩は、教義を重んじ、司祭階級が一般信者と真理との間に介在して支配するカトリック教権制であった。「反対者は正直でもなければ聡明でもないと頭から決めこむ点で、カトリック教徒と共産主義者は似ている。両者はいずれも、『真実』は既に明らかにされているのであって、異端者は正真正銘の馬鹿でないとすればひそかに『真実』だと知りながら利己的な動機から反対しているにすぎない、と暗黙のう

ちに主張している。」（「ペンの自己規制」）オーウェルは、知と権力の聖なる序列に支えられた権威主義的独裁制（ファシズムとスターリン主義）を告発したが、その告発のきっかけは左翼知識階級と右翼知識階級の間の奇妙な文体と語彙の類似性であった。それはいずれも権力の司祭者のコトバであった。そこにオーウェルは知識階級特有の疾患を見た。ファシストたるとコミュニストたるとを問わず、自己の支持する体制が犯した最悪の不法行為を擁護するのは一体どのような精神構造によるのか。強制収容所、秘密警察、見世物裁判のような人間性に対する侵害について、知らぬ顔をしたりその事実を否認するのは一体なぜなのか。オーウェルは、ソヴェト・ロシアとスターリンに自分たちの忠誠心の対象を転移させたイギリスの左翼知識階級に属する余りに多くの人々がこの疾患に犯されているとみた。そしてその原因は、進歩への衝動のうちに隠された権力欲だと考えた。オーウェルは、「彼らが自分自身の権力欲を発散し正当化するためのひとつの手段として、社会主義の理念を利用しているのにすぎないのだ」と感じていた。逆にいえば、「彼らが公言する目的自体はなるほど純粋なものであるが、そうした発言の底には運動を支配し管理しようという気持が隠されている」というのである。（ツヴァドリング『オーウェルと社会主義』）異端者に対する迫害はその徴候である。彼は、例えば『空気を求めて』の主人公ジョージ・ボウリング（彼はなお人間らしさ（デイースンスィ）が存在した古き良きイギリスを愛する平凡な保険外交員だ）の感慨を通して、左翼の反ファシズムの論潮のなかで吐き出される激烈な感情の裡に恐ろしいほどのむき出しの権力欲、抑圧された残忍性がありありとうかがわれることを明らかにした。主人公ボウリングは、ある冬の夜、左翼ブック・クラブ主催の反ファシズムの講演会に出席して、講師がファシズムの脅威と非人間性を「レコード盤のように」声高に指摘しつつ人々の憎悪をかき立てるという光景にどうしようもない異和感を感じる。ファシズムの非人間性に対するむき出しの憎悪――その奇妙な逆説に彼は困惑する。この熱烈な反ファシズムの演説が、内容、調子、語彙やレトリッ

クの用法においてファシストと同じくらい画一的であることにうんざりする。それは空虚な言葉の氾濫、人間的品位を失い死語と化したイデオロギーの言葉の羅列であった。オーウェルは、主人公の語り口を通じて、記号としての政治語彙がリアリティを失って一人歩きするという痛ましい光景のなかに、ファシズムとスターリン主義の対称性があることを示そうとした。それは、豊かな意味形成的実践という性格を失った記号としてのスローガンの乱舞する政治集会の裡に、当人たちも意識しない権力衝動が隠されているという認識であった。これは容易ならぬ告発であった。この批判は、いわば検察官のそれであった。その決定的な証拠として提出したのが、既に幾度も述べてきたように、ソ連邦に対する左翼知識人の態度であった。この告発は死ぬまで変らなかった。オーウェルは、のちにJ・バーナム論の中で書いているように、二〇世紀の「汚れた手」は、進歩的な精神と権力衝動との結合からなっていると考えていた。「権力崇拝が親ソ感情の唯一の動機だといえばはなはだしく公正を欠くことになるだろうが、しかしそれもひとつの動機であり、おそらく知識人の場合には最も強力な動機である。」(「J・バーナムと管理者革命」)

オーウェルは、イギリスの知識階級がごく少数の例外を除いてソ連に対する一種の国家主義的忠誠を示し、その政策に対して不誠実といえるほどの無批判的な態度をとっているのを繰り返し批判した。彼はこの忠誠の態度の背後に、権力崇拝という疾患が隠されていると考えた。このソヴェト神話の盲従と権力崇拝は、彼の最も重要な論文「ナショナリズム覚書」において独特の定義を与えたナショナリズムの精神態度でもあった。オーウェルの定義するナショナリズムは、普通国家主義といわれる思想傾向以外のさまざまなものを含んでいる。なによりもまず彼は、ナショナリズムと「愛国心(パトリオティズム)」を区別する。彼のいう愛国心は、たまたま自分と何かの関係のある「特定の地域と特定の生活様式に対する献身」の態度であり、本来軍事的な意味でも文化的な意味でも防御的なもの

である。いってみればそれは、同じ土地に住む仲間への愛であり、郷土(カントリー)をいつくしむ感情である。ここにはオーウェルが生涯大切にしたある種の保守感情（保守主義ではない）がある。そのようにして彼は名もなき庶民との日常的な会話を大切にし、自然を愛し、動物を飼うのを楽しみ、魚釣りを好んだのである。それに対してナショナリズムとは、何千万という人間集団全体を自信をもって「善」とか「悪」とかに分類できると思い込んでいる精神態度であり、自分をひとつの国家その他の単位と一体化してその利益を推進すること以外の義務は認めないような精神習慣である。ナショナリストは、「自己の存在を没入させることを誓った国なりなんなりの単位」のために、より大きな勢力、より大きな威信を獲得することを不断の目標とする。このような独特の定義による広い意味でのナショナリズムには、国家主義や国民主義だけでなく、共産主義、政治的カトリシズム、シオニズム、反ユダヤ主義、トロツキズムなどの運動も含まれる。ナショナリストは、自己の殉じている陣営や対象の優越性を主張し、物事（軍事力や政治的勢力だけでなく、芸術、文学、スポーツ、言語、住民の肉体美、はては気候や風景や料理に至るまでの一切の事柄）をつねに威信競争と関連づけて考える人間である。それ故ナショナリストは、自己の陣営によってなされた暴虐行為は非難しないばかりか、しばしばその事実さえ否定する。行為はそれ自体の価値によってではなく、どちらの陣営がやったかによって善悪が決められる。「過去の改変」はその論理的帰結である。「現代のプロパガンダ」にしばしばみられるように、重要な事実が隠蔽され、日時が変更され、前後に関係なく一部だけ引用して意味を変えてしまう。そして起るべきでなかったと思われる事件についてはロをぬぐって語らず、最後には否定する。例えば、一九二七年に何百人もの共産党員を釜ゆでにした蔣介石は、十年とたたないうちにイギリスの共産主義者（ナショナリスト）によって反ファシズムの英雄の一人にされた。あるいはまた、トロツキーはロシア革命でたいした役割を果さなかったと信じさせるために大規模な歴史の書き換えがおこなわれた

が、この手のこんだ証拠偽造の責任者たちは、単に嘘をついているのではなく自分たちこそ未来の正義を担っているのであり、それに合うように記録を再編することは正しいことなのだと感じている。こうしてオーウェルは、ナショナリズムを「自己欺瞞を伴った権力欲」であり、それには常に現実感覚と正邪の意識を狂わせる「恐怖、憎悪、嫉妬、権力崇拝といった感情」がつきまとうと結論するのである。

オーウェルは、客観的真理という概念を攻撃し未来ばかりでなく過去まで牛耳ろうとする全体主義的ナショナリズムの恐ろしさを指摘し続けた。また例えば、戦争は資本家たちによって引き起こされる意味のない殺戮であり兵士は自分の士官を忌み嫌い、敵を同志とみなすといいながら、ひとたび「赤軍」が問題になると戦争は光輝に満ちた行為となり、兵士たちは積極的に軍規を守り、上官を敬愛して敵を悪魔のように憎む、と宣伝する左翼知識人の「分裂症的態度」を批判し続けた。(「ロンドン通信」、『パーティザン・レヴュー』一九四四年四月) そしてソヴェト崇拝による「二重の道徳規準」の使い分け――一方では大量追放、強制収容所、強制労働、言論の自由の抑圧を恐ろしい犯罪であると叫びながら、ソ連で行われたこのような犯罪については無視するか、ファシストの悪質な中傷であると反論する――を告発し続けた。(「『トリビューン』編集長への未掲載書簡」一九四五年六月) この告発のなかで、オーウェルは、なぜイギリス知識階級が、このような自己欺瞞を伴う権力崇拝、分裂症的態度、二重の道徳規準の採用など――これらはほんの一例にすぎない――にみられるように、代替ナショナリズムあるいは「転移ナショナリズム」(「ナショナリズム覚書」) に惹かれたのかについて、重要な洞察をしている。彼は、親ソ派の左翼知識人におけるソヴェト幻想は一種の精神的代償行為だと分析した。それは、祖国 (帝国主義国家) や伝統的信仰から自己を解放するにあたって支払われなければならなかった代償であった。彼らの千年王国的社会主義の理想は、「信じられるなにものか」を必要とし、より強くより正しいなんらかの外的権威に同化したいという

心理的欲求の投影であった。オーウェルは、社会主義が一種の教権制と化した理由は、知識人が新たな宗教を必要としていたからだ、と主張した。彼らの宗教的感情はただ対象を変えただけだった。それ故、不合理、幻想、強迫観念、不寛容、現実無視、異端迫害、権力崇拝が生れてくる。

愛国心、宗教、帝国、家族、神聖なる結婚、同窓会の絆、生まれ、育ち、名誉、規律――普通の教育を受けたものならば、こういうものの価値をひっくりかえすのに三分とはかからない。だが愛国心とか宗教というような根本のものを放り出してしまうことによって、結局何を実現するということになるのか。それでも何か信じたいという欲求そのものを放り出してしまったことにはならないのだ。（中略）なぜ三十年代の若い作家たちが共産党に入党したり、期待を寄せたりしたのかを、これ以上説明する必要はないと思う。それは単純に何かを信じたいということだったのだ。ここには教会、軍隊、正統、規律があった。ここには祖国があり、ともかくも一九三五年かその頃以後にはひとりの指導者がいた。知性がすでに追放したかにみえたすべての忠誠と迷信が、わずかに衣裳を替えただけで一挙に復活できたのだ。（中略）要するにそれは根無し草になった人間の愛国心なのである。（「鯨の腹の中で」）

社会主義を求める運動の有効性は「神話（ミート）」に基づかなければならないと主張したのは、ジョルジュ・ソレルであった。そしてオーウェルが知識人の代替信仰、転移ナショナリズムを攻撃したときの念頭にあったのは、ソレル『暴力論』のような革命理論であった。ソレルによれば、人民大衆を革命運動へと駆りたてるものは、彼らの運動は絶対的に正しく、それは必ず勝利するという内的確信である。「現在の革命的神話（ミート）は、決定的闘争に突入す

る準備を整えつつある人民大衆の活動・感情および思想を理解することを得させる。それは死んだ事物の叙述ではなくて、生きた意志の表現である。」(『暴力論』) ソレルは、この神話は革命的組合(サンディカ)の組織的暴力としての総罷業(グレーブ・ジェネラル)の観念の中に息づいていると主張する。「彼ら(プロレタリアート)のおかげで、我々は総罷業というのが確かに私の既に言ったもの——即ち社会主義がすっかりその中に収約されるところの神話、換言すれば社会主義によって近代社会に対して行われる戦争の種々な発現に照応するあらゆる感情を本能的に喚起し得る形象(イマージュ)の組織化であることを知る。罷業は、プロレタリアートのうちに、彼らのもつ最も高貴な、最も深刻な、そして最も動的な感情を発生させた。総罷業はそれらの感情を全て、全体的な一図表の中へ結集し、そしてそれらの対比によって、その各々に対してその最高の強度を与える。個々の闘争の極めて痛烈な追憶に訴えながら、総罷業は意識に浮んでくる構成のあらゆる細部を強烈な生命をもって彩る。我々はこうして、言語が完全には明確に伝え得ないあの社会主義の直観を獲得する——しかも瞬間的に知覚される全体においてこれを獲得するのだ。」(同)

だがこのようなプロレタリアートの革命的神話としての社会主義は、ソレルにおいては、それ自体で一つの宗教であった。彼は生きた歴史的な力としての神話の顕著な事例を、原始キリスト教、宗教改革、フランス革命、そしてなかんずくカトリックの戦闘的教会の神話のうちに見い出す。カトリック教徒の神話は、サタンとキリストに支持された聖職階層制(イエラルシー)との間の一連の闘争によって生命を吹き込まれていた。一九世紀はじめには、フランス革命の迫害という新たなサタンとの闘争が、ジョゼフ・ド・メーストルの雄弁において、この戦闘的神話を復興させさえした。こうしてソレルは、神話としての社会主義を現代のキリスト教の倫理的改革の精神を継承するものと見做すのである。「人々はまた、現代においてはキリスト教が一つの教義というよりもむしろ一つのキリスト教的生活、言い換えれば心の奥底にまで徹しようと欲する一つ倫理的改革となろうとする傾きをもつであろ

うということをみる。従って人々は、一つの巨大な事業を目標とする個人の鍛練・準備――否、この個人の改造をすら目的とする革命的社会主義と宗教との間に新しい類似を発見したのである。革命的神話も、宗教と同じ資格において、そこに自分の席をもっているのだ。」(同) オーウェルは、偉大な宗教としての社会主義、神話としての革命を批判した。彼はこの代替信仰のなかに、「自己欺瞞的な権力崇拝」の精神的淵源をみ、義は我にありとする確信による異端狩りの心理的正当化をみた。今や社会主義の未来を語る者は幻想から自由になるべきだ。オーウェルはとくにソレルに言及して次のように述べている――

真の答えは、社会主義をユートピア主義から分離することである。……社会主義者は、社会は完全に完成させることができる――むしろ社会主義が樹立されればそうなるであろう――ということ、また進歩は不可避であるということを信じていると非難されている。このような信念をけなすのは、もちろんたやすいことである。普通に言われているよりも声を大にして言わねばならない答えは、社会主義は完成可能論ではないし、おそらく快楽主義的でもないということである。社会主義者は、世界を完全なものにできるとは主張しない。よりよいものにできると主張するだけである。(「私の好きなように」、『トリビューン』一九四三年十二月二四日)

オーウェルにとって全体主義の恐ろしさは、既に述べたように、その恐怖(テロル)支配だけでなく、客観的真実という観念を容赦なく攻撃していることであった。それは現在を支配するだけでなく過去をも意のままに牛耳ろうとする。そして過去を支配することによって未来を指示しようとするのである。全体主義国家は思想を統制し、人民の絶対的服従の必要から議論の余地のない無謬のドグマを打ち立てるが、権力政治の要求に応じて日毎にその解

釈を変更する。一九三八年九月のヒトラー――スターリン協定はその深刻な例であった。まさに月曜日には不可侵の正統思想であったものが、火曜日には許されざる異端に転落するのである。そこでは自主的な個人は、否、「自主的であるという幻想」でさえ存在を許されない。オブライエンがウィンストンに語ったように、全体主義権力は、「汝、斯くすべからず」だけでなく、また「汝、斯くすべし」と命ずるだけでもなく、「汝、斯くなり」を要求する。つまり何を考えるべきかを命じ、あるべき人民となるよう不断に教化する。そのとき文学者は「人間の魂の技師」（スターリン）となる。作家オーウェルにとってそれは、「一人の人間が考え感じることの真実の表現」としての文学の消滅を意味した。彼は全体主義文学による文学の消滅の危機を訴えた。なぜなら、書くという行為は、時の正統に忠誠を誓うことによってではなく、「言っていることの真実性を心から感じている」ことによって可能となるからであり、それ抜きには創作の意欲さえ生れてこないからである。彼は次のように文学の不可能性を診断する。全体主義による思想の統制は――

単に消極的であるばかりでなく、積極的でもある事実を理解することが大切です。それは、人々がある思想を表現することを――いや考えることさえ――禁じるばかりでなく、何を考えるべきかを命じ、彼らにむけてあるイデオロギーを作りだし行動の規範を設定すると同時に、その感情生活をも支配しようとします。そして可能な限り外部世界と関係を絶ち、いっさい比較する基準のない人為的な世界に閉じ込めるのです。いずれにせよ、全体主義国家はその人民の思想や感情を、少くともその行動を統制したように完全に統制しようとします。（「文学と全体主義」、BBC海外放送番組での講演、『リスナー』一九四一年六月十九日）

作家オーウェルは、このような文学の禁圧状況がファシストばかりでなくスターリン主義に毒された左翼知識

人の精神をも蝕んでいることを、彼ら特有の文体と語彙の検討を通じて明らかにしている。「政治と言葉」というオーウェルの政治思想の解明にとって最も重要なテーマに通ずるこの問題を詳しく分析することは別の機会にして、まず端的に、彼がさまざまな機会に批判した共産主義者の罵倒用語のリストを掲げることにしよう。それは例えば次のような単語と表現である――「アキレスのかかと」、「長靴」、「ヒドラのように多頭の」、「蹄鉄にかける」、「背後からのひと突き」、「プチ・ブルジョア」、「屍臭のにおう死体」、「一掃する」、「鉄のかかと」、「血にまみれた抑圧者」、「冷笑的なる裏切り」、「下僕」、「使用人」、「狂犬」、「ジャッカル」、「ハイエナ」、「血戦」、「盗賊」、「絞刑吏」、「吸血鬼」、「けだものじみた残虐行為」、「血ぬられた専制」、「悪魔のような」……。このような死にかけた陳腐な隠喩やきたならしい直喩のきまり文句を機械のように組みあわせれば例えば次のような文章ができあがる――「ヒドラのように多頭の長靴（ラッシャブーツ）が血にまみれたハイエナを蹄鉄（ラッシュショウド）にかけている。」（「私の好きなように」、『トリビューン』一九四四年三月一七日）オーウェルは、このような「きたならしい言葉のごった煮」の文章を書く人々は、はたして「言葉には意味があること」を意識しているのか、と批判する。このような言い回しをする人間は、おそらくいくぶんか機械になりかかっているのであろう。彼は無意識のなかでファシズムに対する憎悪の情念を感じているのかもしれないが、自分の言っていることをほとんど意識していないであろう。これは精神に対する侵略である。オーウェルによれば、このような「意識機能の低下」と生きた人間の「人形」化こそ全体主義政治の目ざすことなのだ。（「政治と英語」、『ホライズン』一九四六年四月）

オーウェルは、同時代のイギリスの散文とくに政治的文章の著しい特徴は、あいまいさと死にかけた隠喩の乱用による新鮮なイメージの欠如とであると指摘している。特定の論点が提起されるや、具体的なものがあいまいな抽象のなかに溶けこめられてしまう。政治的散文はますます意味のために選ばれた語が減り、「プレハブの鶏

小屋の部分のように」つなぎ合わされた句で構成される。例えば、「ファシズムのたこ（「多方面に有害な勢力をふるう組織」）は白鳥の歌（「最後の曲」、「辞世」、「絶筆」）をうたった」とか「長靴はるつぼに投げ込まれる」（「軍は大改造される」）とかのように互いに衝突する隠喩を部品を組み合わせるように用いる人は、じつは自分があげている対象を本当には考えていないのだ。こうして彼は、擁護できないものを弁護しようとする政治の言葉が、「婉曲法」と「論点回避」と「もうろうたる曖昧性」とから成り立たざるをえないと言う。一群の人々が裁判抜きで何年も投獄され、北極の木材切出場へ送られて壊血病で死ぬことが、「好ましからざる分子の除去」(elimination of unreliable elements)」と言われる。「ロシアの全体主義を弁護するぬくぬくとしたイギリスの教授」は、たとえば、「そうすることによってよい結果が得られるなら、反対党の連中を皆殺しにするのに賛成だ（"I believe in killing off your opponents when you can get good results by doing so".）」とは決して言わない。彼は次のように言う——

ソヴェト体制が人道主義者の慨嘆を招くかもしれないような若干の様相を呈していることを率直に認めるとしても、私の思うに、我々は、政治的反対の権利のある程度の削減は過渡期の避けられない付随物であり、ロシア国民が忍ぶよう求められている厳しい試練は具体的成果の領域において十分正当化されてきたということに同意しなければならない。("While freely conceding that the Soviet regime exhibits certain features which the humanitarian may be inclined to deplore, we must, I think, agree that a certain curtailment of the right to political opposition is an unavoidable concomitant of transitional periods, and that the rigours which the Russian people have been called upon to undergo have been amply justified in the sphere of

concrete achievement.”）（「政治と英語」）

修辞上のからくりを用いて、「殺す」を「一掃する」あるいは「排除する」という言葉におき変える政治的言語が思考を衰弱させ、腐敗した思考が言語を堕落させる。オーウェルはこの悪循環をたち切ろうとした。言葉の能力の低下は、人々の政治的判断の能力を低下させ、道義心と責任の観念を弱める。知的誠実と政治的責任感を大切にしたオーウェルにとって、言葉についての考察は彼の政治思想の重要な部分であった。「政治的著作を一つの芸術に高めようとした」（「なぜ書くか」）作家オーウェルは、その文学的本能を傷つけることなく政治における真実を語ろうとしたのである。

追記

（1）本稿の性格上、細かい注記を省略した。『カラマーゾフの兄弟』からの引用は原卓也氏の訳（新潮社版）による。また『一九八四年』については新庄哲夫氏の訳を、『オーウェルのエッセイ、ジャーナリズム、レター全集』については平凡社版『オーウェル著作集』（全四巻）と鶴見俊輔編訳『右であれ左であれ、わが祖国』（平凡社選書）ならびに小野寺健編訳『オーウェル評論集』（岩波文庫）をそれぞれ参照した。

（2）現在、ソ連において、ブレジネフ政権末期の「亜スターリン主義」状況を否定し、いわゆるゴルバチョフ改革――その総体を同書記長は「革命」と呼んでいる――が精力的におこなわれている。それにもかかわらず、日本の左翼系知識人のなかには、オーウェルを研究すること自体アメリカ帝国主義に対する利敵行為であると非難する人がいる。私は、「私的検閲」さえ言いかねないこれらの人々の精神構造は、あらわれ方は左右対称であるけれども、I・ドイッチャーの有名な逸話――『一九八四年』を読めば、なぜソ連に原爆を投下しなければならないかがよく分ると彼に語ったニューヨークの新聞売り子の話――におけるのと全く同一であると考える。オーウェルの生涯と彼の文学は、ある意味では、このような精神との闘いの歴史であった。

（一九八六年十一月十五日）